

# 山王廃寺跡第3次発掘調査概報



前橋市教育委員会

1977.3

## 序

仏教のわが国の文化に及ぼした影響は大きい。とりわけ、古代社会における仏教の初めての受容は、これまで古墳の築造に注がれていた巨大なエネルギーを、寺院の建立に傾けるなど、文化の面に多大の変化をもたらした。

白鷺のむかし、上毛野国・四神相応の地とされる總社町の地に建立された山王庵寺は、こうした状況を背景としたものとされる。すなわち、山上庵寺の、全国にも珍しい石製鷲尾や根巻石、そして巨大な塔中心礎石などにみられる石材の加工技術は、隣接して所在する。わが国の終末期古墳の典型とされる史跡宝塔山古墳などの石棺や、石室石材の加工技術と共に通するものがある。ここに、山王庵寺の建立が、古墳文化から仏教文化への転換期にあったことは明らかであり、そこには、全国的にも卓越した群馬の古墳文化の結実と、東方の姫国上野古代文化の原点とみることができ、文化史研究上きわめて貴重な資料とされている。

ところで、こうした山王庵寺跡の所在する總社町山王の地域は、古くから養蚕種の生産で知られた純農村地帯であったが、しかし、最近における産業構造の変化は、この地にも影響を及ぼし、漸次変貌をとげ、近代的な都市近郊農村へと変わりつつある。こうした中にあって、最近、土地改良事業も実施され、これを契機に宅地造成も目立ってきたが、これら一連の開発によって、貴重な文化財であり、また、学術的な資料でもある山王庵寺跡は、伽藍配置や規模、形状など全く解明されないままに、地中深く埋もれてしまうおそれが生じていた。

前橋市教育委員会では、こうした山王庵寺の状況に対して、長期的な学術調査を計画し、ここに国庫および県費補助を得て、第3次発掘調査を実施した。調査は、炎天下に行なわれたにもかかわらず、関係者一同よく力を結集していただき一応の成果をみた。

ここに発掘調査概報を刊行するに当り、調査関係者と共に、ご指導・ご協力いただいた土地所有者をはじめ関係各位に、改めて感謝申しあげると同時に、この成果が広く活用され、文化財保護の礎となることを願うものである。

昭和52年3月5日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

## 凡　　例

1. 本報告は、国庫・県費補助による昭和51年度埋蔵文化財保存事業山王廃寺跡緊急調査の概要をまとめたものである。なお、発掘調査は前橋市教育委員会が主体となって実施した。
2. 報告書の執筆は、調査に当った社会教育課文化財保護係の者が以下のとおり分担した。  
I・II-3-(1)(2)・III 石川克博, II-1, 2-(1)(2)(3)  
相沢真頃, II-2-(4)(5)(6) 中村富夫, II-3-(3)及び  
遺物実測 宮沢敏弘, IV 松島栄治  
3. 出土遺物は、前橋市教育委員会が整理保管している。
4. 調査および出土品鑑定等、前橋市文化財調査委員尾崎喜左雄博士の指導を受けた。

## 目 次

### 序

I 発掘調査経過	1
1. 調査にいたるまで	1
2. 調査の目的・方法	2
II 発掘調査の概要	4
1. 地 層	4
2. 遺 構	6
(1) 概 類	6
(2) 磚石群A	6
(3) 磚石群B	9
(4) ピット群	13
(5) 溝状遺構	18
(6) 壁穴住居跡(4号・5号・6号)	19
(7) その他の遺構	21
3. 遺 物	22
(1) 丸 類	22
(2) 金銅製品・その他	34
(3) 壁穴住居跡内出土遺物	36
III 推定寺域一帯の現形測量について	38
IV 結 語	39

## 挿 図 目 次

1. 遺跡の位置図	1	1.(1)発掘前の状態
2. トレンチ位置図	3	(2)発掘後の礎石群の状態
3. 地層柱状図	5	2.(1)礎石群Aの瓦の各部
4. 磚石群A 平面実測図	8	(2)磚石群東の瓦の堆積
5. 磚石群B 平面実測図	10	3. 磚石群Aと磚石群Bの各部対比
6. 磚石群A・Bの断面実測図	12	4. 磚石群東のピット遺構全景
7. 磚石群東のピット群平面及び北側断面実測図	16	5. ピット各部
8. 磚石群東のピット断面実測図	17	6. ピット各部
9. 4号住居跡平面及び断面実測図	20	7.(1)磚石群北、溝状遺構イの瓦の堆積
10. 5号住居跡平面及び断面実測図	20	(2)磚石群北のピット遺構
11. 6号住居跡平面及び断面実測図	21	8.(1)4号住居跡
12. 軒丸瓦拓本及び断面実測図	23	(2)5号住居跡
13. 軒平丸瓦拓本及び断面実測図	27	9. 出土遺物(1)
14. 平瓦凸面の唐草文	29	10. 出土遺物(2)
15. 文字瓦拓本	30	11. 出土遺物(3)
16. 軒丸瓦の接続法についての参考例	31	12. 出土遺物(4)
17. 繩文土器実測図	35	13. 遺構全図
18. 住居跡内出土土器実測図	36	14. 山王廃寺跡現形測量図

## 表 目 次

1. 磚石群Aの礎石の大きさ・レベル・ 地層との関係	7
2. 磚石群Bの栗石の範囲・レベル・ 地層との関係	9
3. 磚石群東の各ピットの形状および規模	14・15
4. 磚石群北の各ピットの形状および規模	14・15

## 図 版 目 次

# I 発掘調査の経過

## 1. 調査にいたるまで



挿図 1 漢跡位置図 (5万分の1)

A 山王寺跡 B 総社二子山古墳 C 愛宕山古墳 D 宝塔山古墳

E 総穴山古墳 F 工山古墳 G 総社神社旧地 H 国府推定地

I 国分尼寺 J 国分僧寺

山王寺跡の発掘調査は、今年で第3年次を迎えた。

第1次は、昭和49年度の山王地区土地改良事業に伴う事前調査であって、山王寺跡発掘調査団の手で寺域縁辺部を主に、寺域確認のための調査が実施された。この土地改良事業ならびに発掘調査の実施によって、山王寺跡一帯の開発と遺跡保護の問題がより鮮明な形となって表わされてきた。

山王寺跡では、塔跡・石製鶴尾・根巻石等多くの貴重な遺構・遺物が耕作等偶然な機会に発見されてきている。これらは、断片的ながらも往時の壮大な寺院の様子を伝えている。しかしながら、本格的な発掘調査はほとんどなされることなく近年まで至っているので、今なお寺域・寺の規模・性格等肝心なことは何も解明されていない。そこで、前橋市では、土地改良に伴う調査が実施され

たのを機に、引き続いて本遺跡の解明を志し、発掘計画を立案し、国及び県に補助金の申請を行なった。幸い、国・県においても遺跡に対する重要性の認識を同じくし、開発関連の緊急調査を認め、翌昭和50年度には補助金の交付を決定した。したがって、昭和50年度からは発掘の主体者が前橋市教育委員会となつたが、遺跡調査そのものは、間もなく実施されたのである。なお、この間の経緯については『山王廃寺跡第2次発掘調査報告』（1976年 前橋市教育委員会）に記述されている。

本年の第3次調査は、昨年度に継続するものであって、国・県補助による開発関連の埋蔵文化財保存事業として前橋市教育委員会が直営で実施したものである。補助を得ての直営の調査としては、第2年目にはいったわけであるが、方2町の推定寺域の大半は市地であって、調査がきわめて困難な条件下にある。市地の一帯やわずかに幸いしている畠地を少しづつ調査するとしても最低10年かかる難事業である。本市では、当初から10年を見込んで計画を立案しており、年次毎に少しづつでも遺構を検出する所存で臨んでいた。本年の第3次調査で選定した場所は、昨年度来手がけている所と地続きの所であって、塔心礎の北40m 東30m付近の既に礎石の存在が確認されていた地点周辺である。この付近は、道路拡幅や住宅建築の話もあり緊急性の高い場所であると同時に、推定寺域内の中心部に近い場所であって、寺域内の重要な遺構のひとつがあるのではないかと考えられている場所でもある。この地は、周囲よりやや高い位置にあり、その高まりは、平石三夫氏宅、阿久津世治氏宅の2軒にまたがっていた。礎石は阿久津氏宅側にあるが、土地所有者の意向もあって昨年度は平石氏宅地の調査を実施した。本年度は、阿久津氏の協力を得、阿久津氏宅の裏庭の礎石を伴う遺構を可能なかぎり調査するはこびとなつた。

#### 〈発掘調査の要項〉

遺跡所在地	前橋市總社町總社昌楽寺廻り一帯
発掘場所	前橋市總社町總社2405番地 阿久津世治氏宅裏庭
調査期間	昭和51年7月26日～同年8月14日
発掘担当者	松島栄治・相沢貞順・中村富夫・石川克博・江原清・宮澤敏弘
調査主体者	前橋市教育委員会（主管 社会教育課）
調査員	藤岡一雄（共愛学園教諭）・審岡英夫（前橋工業高校教諭） 川合 功（前橋市立七中教諭）・清水和夫（前橋市立朝倉小教諭）
作業員	群馬大学歴史研究部学生・前橋工業高校歴史研究部生徒
整理員	山王地区自治会・山王土地改良区・山王農事組合・阿久津世治氏・都丸民司氏 阿久津貞夫氏・前橋工業高校（齊藤茂夫教諭・宮崎弘一教諭）・共愛学園（角田進教諭及び歴史研究部生徒）ほか
協力者	

## 2. 調査の目的・方法

山王廃寺跡発掘調査の目的は、寺域の確認、寺の規模・性格の究明を図り、遺跡の保護・活用を推進することにある。

かような目的は、調査がかなり進行した段階でないと達成し得るものではないが、当面する本年度の調査にあたっての目標をおおむね次のように設定し、寺の性格の一端にでも言及できることを期した。

- ①心礎の北40m 東30m付近の既に所在が明確な礎石を伴う遺構を剖り出し、この遺構の性格をあきらかにしようとする。
- ②第2次調査で発見された掘立柱建築遺構のものとみられる柱穴の広がりを追い、掘立柱遺構の性格をあきらかにしようするとともに、礎石を伴う遺構との関連の有無についても調べる。

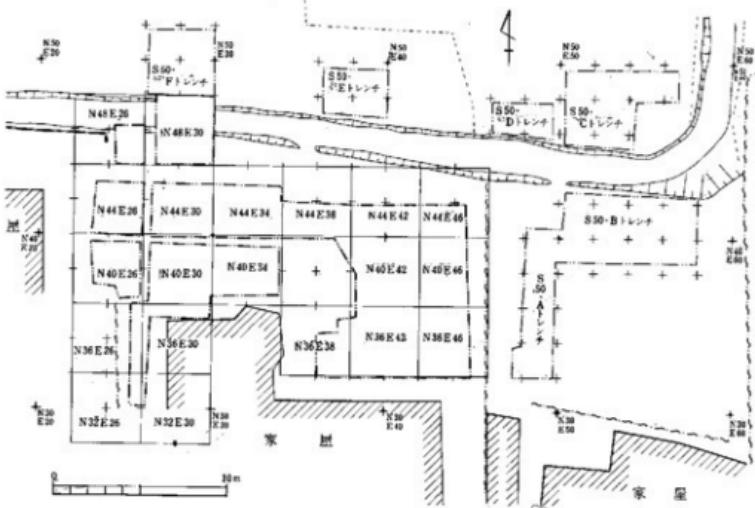


図2 トレンチ位置図

- ③瓦等の出土遺物を整理・研究し、遺物面から遺跡の発明にあたる。
- 発掘調査の方法は、第1次・第2次調査の基本線にそって進め、寺域全体の中でのトレンチや遺構の位置関係が、比較検討し得るように進めることとした。その基本的な事柄を以下に示す。
- ①塔心礎含利孔の中心を基準原点として、南北（磁北）・東西の軸線をとり、グリッド設定を行なう。なお、心礎の上面をレベル原点0とする。
  - ②推定寺域内のすべての点は、心礎を原点とした座標で表わす。たとえば、心礎の北30m東50mの地点はN30E50であり、心礎の南25m西15mはS25W15のごとくである。
  - ③軸線は10mごとに区切って、各線に囲まれた地域に区分してさらに、この10m四方のマスの各辺をさらに1辺2m×2mの小区域25個に細分して基本単位とする。
- 本年度は1辺2m×2mの小区域4個を合わせた1辺4m×4mを単位としたトレンチを設定した。しかしながら、狭い宅地内においてグリッドの区画線にのっとったトレンチを設定することは不可能であり、土地の状態にあわせなければならなかった。また、発掘の進行状況に応じた拡張によってもトレンチは多少変化し、結果的にはかなり不揃いな形をしたものとなった。しかし、基本区域に照らしてトレンチ及び遺構を把握できるようにした。（図2）
- なお、遺構や遺物の記録処理は、今年度は、図2の太線で示した4m方眼で行なった。その4m四方の範囲の名称は、4すみのうち心礎から一番遠い北東の角の座標をとって呼称した。たとえば、N40E26区といえば、N36E22, N36E26, N40E22, N40E26の4点で囲まれた範囲を示す。

## II 発掘調査の概要

### 1. 地層

山王庵寺は八幡川と牛池川に挟まれた低台地上に位置している。両河川とも山王庵寺の北西ならびに南西まではほぼ東流し、しだいに南へ流れを変えて、東および南東ではほぼ南流している。この両河川の流れが示すように、全体としての地形は北西から南東への緩斜面であり、寺域の北東域は八幡川に近接している。塔心礎を中心として、北西約800mと南東約800mとの約1600mでの平均傾斜度は約0.9度である。しかし、さらに小範囲についてその傾斜をみると、塔心礎を中心として、西150m、東135mとの285mの東西の平均傾斜度は2.7度～3.3度であり、塔心礎の北140mと南170mとの310mの南北の平均傾斜度は1.3度～1.8度である。やや広範囲の平均傾斜度に対し、寺域周辺部は東西で約2度、南北で約0.5度傾斜が強いことを示している。この傾向をローム面で比較してみたが、現状では発掘調査された面積も少なく、遺構等のためロームの上面が確実におさえられないで推定でしかないが、東西についてはより強い傾斜になり、南北についてはやや弱く、より広範囲の傾斜に近いのではないかとみられる。この東西方向の傾斜について、ローム面付近では寺域の東縁部が八幡川に近接していることによるものと考えられ、それより上層については山王庵寺構築に関連する整地あるいは搅乱のためとも考えられるが、今後の調査の結果をまたねばならない。

本年の発掘調査地点は塔心礎に近く、宅地内を主とし一部道路面であり、発掘区域は東西24m、南北は最大で18mという小範囲である。このため現地表面での傾斜も平均傾斜度としては意味を持たないが、東西で約1.6度、南北で約2度である。しかし、発掘前に礎石の存在が確認されていた地点から西にかけては周囲より約30cm程高くなっている、平均傾斜度より明確な高低差を示している。また、この地点付近は昨年度の調査地区に隣接しており、その結果では寺域内でも比較的地面の安定した区域とみられている。

本年の発掘調査区域は小範囲であるが、遺構が何種類かあり、3層にまたがって確認されている。このため地表面からローム面まで、全て自然堆積からなっているとみられる箇所はないが、Ⅲ層とした層が部分的に確認されたのみで、他はほとんど同様な層序をなしているので柱状図(挿図3)にそって、その概観を記述する。

Ⅰ層 耕作土 厚さ15～25cmで、竹の根を主とする腐蝕土を含有し、全体にふかふかしている。場所により黒色粘土質の客土がある。

Ⅱ層 黒褐色土(1) 厚さ30～40cmで、さらさらとしていて粒子の細かい浮石(B軽石：浅間噴出軽石で、1108年<天仁元年>または1281年<弘安4年>の噴出と考えられている)を含み、部分的には純層もみられる。また部分的には非常にかたくなっている。層中には瓦・須恵器等の破片もある。

Ⅲ層 黒褐色土(2) 厚さ30～40cmで、2～3mmの粒子の白色部分の多い浮石(C軽石：浅間噴出軽石で、4世紀頃の噴出と考えられている)を主として含有し、やや粘性がある。瓦・須恵器・七輪器等の破片を含んでいる。場所により焼土および炭化物の粒子も見られ、もっとも人工の加えられている層である。

Ⅳ層 黒色土 厚さ10～15cmで、Ⅲ層よりも黒く、かたくてしまっている。この層の上端付近には小指頭人の軽石(F・P：二ッ岳噴出軽石で、600年上10年頃の噴出と考えられている)を含み、その下にはC軽石を含んでいる。確認されている区画は少ないが、この層以下は比喩的自然の堆積とみられる。

IV層 褐色土 厚さ10cm前後で、栗色に近く、やわらかな漸移層である。

V層 ローム 全体に砂質をおびたロームであるが、30~50cmで次第に砂質分を増し、硬くなる。

概略以上のような層序であるが、I層からII層への移行はB鉱石の混入の仕方に相違がみられ、発掘区によっては区分しにくいところがある。II層からIII層への移行もB鉱石が漸移的になっている個所もあり、区分しにくいところがある。III層からIV層へは比較的明瞭に移行しているが、場所によりIII層の鉱石を含む黒色土がIV層に混入している地点もある。III層あるいはIV層からV層への移行は浮石の混入が少くなり、次第に褐色が強くなって、比較的明確に移行している。

III層のC鉱石とIII層のF・Pについては地層の年代が逆転しているわけであるが、III層の確認されたのが4m四方の3区画程度であり、III層の上端付近で小指頭大のF・Pが特に目に付いたということである。II層中にも稀にF・Pは混入しているが、C鉱石が主体である。V層・IV層・III層という堆積は自然の堆積とみられ、III層はやゝ異質である。遺構はIII層を中心にその前後に構築されており、特に復元のはげしい層である。ただ、この層がこれら遺構のために搅乱されただけのものか、整地あるいは客土としておかれたものか問題である。本年までの発掘では非常に広範囲にこのIII層類以層がみられ、広範囲に整地あるいは客土されているか、単なる遺構による搅乱かどうか、今後の調査にまたねばならない。このいずれにせよIII層は年代決定の手がかりになり得るが、III層は直接年代決定の材料にはなり得ない層である。

本年発掘調査した地域の地層は以上のようにある。これら地層のII層~IV層にわたって遺構はみられる。発掘調査以前に存在の確認されていた礫石はI層中に上面を出し、II層下部あるいはIII層の一部に基部を設置している。N48E30区、N44E30区、N36E30区、N32E26区、付近で東西にはしる4本の溝状遺構はIII層上面から掘り込まれ、II層が埋めている。N44E26区等で検出された数個の栗石はIII層中あるいはIII層上面から掘り込まれ設置されている。IV層上面から掘り込みの確認されている遺構にはN40E42区付近等でほぼ南北方向にはしつてビット列および4号~6号の住居跡がある。瓦はII層とIII層では全域から出土しているが、N44E34区、N40E30区からその西の区画にかけては特に密集して出土している。

地層から見た遺構を上層より下層へと整理すると、

II層中の遺構として：存在の確認されていた礫石群（礫石群A）

III層上面からの遺構として：4本の溝状遺構・2つづつ2組の大きなビット（柱穴状ビット群1）

III層中あるいはIII層上面の遺構として：栗石を中心とした礫石群（礫石群B）・遺構1

IV層上面で確認された遺構として：ほぼ南北方向のビット列（柱穴状ビット列1・2）、4~6号の窓穴状住居跡

主なものは以上である。



地層柱状図

## 2 遺構

### (1) 遺構の概観

本年度の発掘調査地点は宅地と道路を主とした地域である。このため発掘調査を進める過程でいくつかの障害物もあり、発掘区の設定も2mあるいは4m四方できちんととれない地点もあった。しかし、遺構については家屋等を除いて、可能な限り発掘を進めることができた。

発掘区域における現地表面の傾斜あるいは高低差は前述のようであるが、やゝ詳細にみると東西についてはE34～E38付近を中心に高低差がつき、南北では北はN44～N48で道路にかかるため段差がつき、南ではN32～N36にかけてはっきりした高低差がある。発掘区の設定は挿図2のとおりであるが、発見された遺構は現地表面の傾斜と関連して、E34付近を壇として西と東でかなり様相を異にしている。地層の概略は柱状図のとおりであるが、やはりE34付近を壇として、Ⅲ層を中心によゝ異なっている。E34以西ではそれ以東に比較してⅢ層がやゝ黒味が強く、焼上粒・炭化物の混入が多く、硬くしまっている。また、Ⅲ層下にⅣ層あるいはそれに類似した層があつてⅣ層に移行している地点が多いのに対し、E34以東ではⅢ層からⅣ層に移行している地点が多い。しかし、これららの地層の相違も地表面の傾斜と同様にE34付近を壇として漸移的に移行しており、上下の地層の相違のように一線を画することはできない。これらの相違は遺構のつくられた時期の違いによるものか、整地あるいは客土等によるものか問題であるが、本年度の調査では重複する遺構が多いために、究明できなかった。

E34以西には2組の礎石あるいは栗石の地形群と住居跡1戸があり、N48E30区ではピットが発見されている。また東西方向の溝状遺構4本がある。発掘調査以前に存在が確認されていた礎石3個とそれに関連すると考えられる数個の栗石はN36E30区を南東端として、Ⅱ層中に設置されている。これを礎石群Aと仮称する。この礎石群Aに近接して発見された数個の栗石からなる地形が3個所で発見されている。これららはⅢ層中あるいはⅢ層上面に設置されており、栗石の状態から礎石の存在したことが推定されるので、これを從石群Bと仮称する。4つの溝状遺構の最北のはN48E26区N48E30区で発見され、方向は昨年度発見の溝と合致してくると見られる。これを溝状遺構Iと仮称する。これの南にはN44E26区の南端付近からN40E46区の北端寄りに発見された。これを溝状遺構IIと仮称する。南端付近のはN36E30区とN32E26区とで発見されており、これらをそれぞれ溝状遺構IIIと仮称する。溝状遺構I・II・IIIともにⅢ層上面から掘り込まれ、Ⅱ層が埋めている。

E34以東には数個のピットとピット列および住居跡2戸がある。ピットおよびピット列は長方形に近いものが多く、大小さまざまある。多くはⅢ層およびⅣ層上面から掘り込みが確認されており、ローム層を掘っていることもあり、しっかりした穴になっている。N48E30区等で発見されているピットも含め、多くは柱穴と考えられるが、建築物を推定するまでにはいたっていない。すでに発掘調査されているピットとともに合せて検討する必要があり、これらピットの仮称はそのピットの性格が明らかになった時点でつけることとして、年度別に番号を付して記述する。住居跡はN36E46区付近およびN44E38区で発見されており、E34以西にもN40E26区にある。これら堅穴住居跡はいずれも土師器を使用しており、Ⅳ層上面からの掘り込みが確認されている。これらは前年度発掘された住居跡の継続番号として各々4号・5号・6号住居跡とする。

### (2) 矩石群A

N36E30区を南東端として、礎石3個・栗石の地形2個所が発見され、いずれもⅡ層中あるいはⅢ層上面付近に下部が設置されていた。これら礎石および地形の位置関係ならびにその記述上の番

号は標図4のとおりである。礎石番号1・2・4は礎石で、3・5は数個の栗石である。1・2・4の各礎石の中心を求め、次に礎石間の方向を直角にとり、柱の中心を推定して、心心間の距離を計測すると、1・2間は300cm、1・4間は390cmである。また、これに基づいて方向を測定すると北5.5度東である。各礎石の大きさ、レベル、地層との関係等は表1のとおりである。

礎石番号	最大径	推定柱の中心より				レベル					
		北へ	南へ	西へ	東へ	最上面	上部平均	確認	最下部	栗石	II層上面
1	96×83	55	35	42	39	+37	135.5	-13	16	+21～+25	9～-13
2	87×79	44	34	41	35	+25	124.5	+4	+4	+19～+23	+4～-6
3	80×68	33	36	29	37	+33	130.5	-5	不確認	+25～+28	+13～-18

表1 磊石群Aの礎石の大きさ・レベル・地層との関係(数値の単位はcm)

礎石番号1・4は厚さが40～50cmをうわまわっているが、2は16～22cmで、比較的貧弱である。各礎石と地層との関係は表1のとおり礎石上面はII層の上へ5～10cm出ている。III層は礎石の周囲が凹んでおり、礎石を設置するためには掘り込まれたものとみられる。この掘り込み面は明らかではないが、礎石番号2はII層を除くとほとんど礎石自体が浮く状態である。この礎石付近のII層はIII層と混ざった状態であるが、III層には焼土・炭化物等の粒子が多く混入しており、明確に区分できる。この状態でII層は整地あるいは客土とは考えにくく、III層を掘り込んだ部分を埋めている上も軟かいII層である。これららの点から礎石の設置された時期はII層中にあると考えられる。栗石は礎石の下部に接してみられるが、その数量は少なく、掘り込まれているIII層の上面とは離れている箇所が目についた。数個の栗石からなる地形は礎石番号3・5である。礎石番号3の栗石は礎石番号1と2の心心を結ぶ線の南延長上300cmの点付近にあり、N36E30区とN40E30区とにまたがって位置している。N36E30区はこの礎石確認のために設定した区画であるが、土蔵に近接しており、南北巾は約30cmしかなかった。礎石番号1・2から推定した柱の中心点はトレント南端より北約20cmにあたり、栗石はそれより北側5cmから23cmの間に4石が発見された。4個の栗石は全体として南へ傾斜しており、栗石の最上面は+7cmでII層中にある。II層上面は+20cmで、III層上面は+8cmである。III層は栗石北端より北へ40cmの点から南が掘り込まれており、栗石の下では-16cmとなり、栗石下端と同一レベルになっている。なお、このIII層の掘り込みはこの地点にある東西方向の溝状構造と一致し、溝状構造の一部ともみられる。また、栗石の横からは吹子口の破片が出土している。礎石番号5の栗石は礎石番号1・2・4の心心から直角にとった礎石番号2の西390cm、礎石番号4の南300cmの点近くにある。この付近には礎石群Bの数個の栗石が北東にあり、この礎石番号5の下には6号住居跡がある。これらのため最終的には時間の制約を受け、周囲を充分広げて調査することができなかつた地点である。礎石番号1・2・4から推定した柱の中心より東側を全て調査したが、中心点より南東12cmから40cmの間に2個の栗石が発見された。この2個は南東から中心点方向へ傾斜しており、栗石の最上面は+3cmと+1cmである。この付近でII層上面は+12～+18cmで、III層上面は+1cmである。このIII層が-22cmまで掘り込まれている。なお、礎石群Bの栗石は-4～-34cmであり、6号住居跡の床面は-62～-68cmである。礎石番号1・2・4に対し3・5は栗石の地形であるが、位置、レベルおよび地層との関係からみて、これららは同一建物の礎石および地形と考えられる。

この礎石群Aの広がりを調査したが、西と南は建造物のため調査不可能であった。東側では礎石番号1・2の東を広範囲に調査したが、礎石あるいはその痕跡とみられるものはなく、礎石番号1・2・3の列がこの礎石群の東端と考えられる。北側については礎石番号1・3の心心を結ぶ線の延長上300cmの点付近に多数の瓦破片と共に栗石らしい石が2～3個発見された。しかし、この付

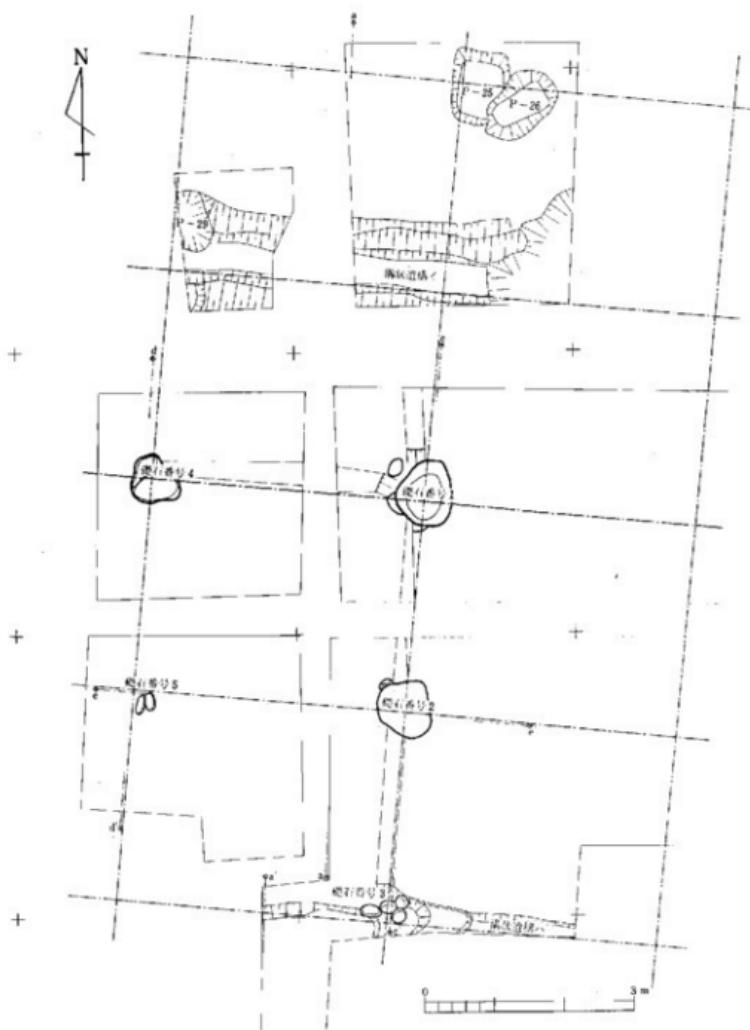


图4 磁石群A 平面实测图

近は道路面にさしかかる地点であり、南北4m巾の区画内で地表面が+62cm～+11cmと傾斜している。さらに、下部には溝状遺構があり、それを多くの瓦破片と礫とで埋めている。この様な状態のため、栗石を明確に検出することは困難であった。ただ、推定した柱の中心点より南12cmのトレチ南端の断面には柱の中心点付近を中心としてⅢ層が±0cm付近から-12cmまで落ち込んでいるこの落ち込みは礫石群Aの他の掘り込みとはほぼ同じレベルおよび形態とみられる。これらの諸点よりすると礫石が存在した可能性はあると考えられる。礫石番号1の北600cmの点については推定した柱の中心点付近にピットがある。このピットは推定した柱の中心点を西端中央として、下部径76cm×65cmの長方形で、部分的にはⅡ層が埋めている。しかし、この付近ではⅡ層上面が-10cm前後であり、ピットの下部は-86cmである。これらレベルあるいは形態からみると礫石群Aとの関係は考えられない。さらに、礫石番号1の北900cmの推定地点は昨年度発掘調査したFトレチにあたっており、そのピット1の中央が推定柱の中心点になっている。これもレベル・形状からみると礫石群Aとの関係は考えられない。礫石番号4の北300cmはN48E26区にあたり、ここに2m四方のトレチを設定したが、西側はブロック塀のため推定した柱の中心はトレチの西約20cmにあたっている。また、この付近はN48E30区と同様に溝状遺構があり、礫石あるいは地形の確認はできなかった。

礫石群Aに隣接する現状での調査可能区域の調査結果は概略上記のとおりである。礫石番号1・2・3の列がこの建物の東端をなし、北は礫石番号1の北に1つ存在した可能性が強い。さらに北については地層相互の関連とそのレベルを対比した場合、礫石の存在は考えられない。また、南については礫石の存在が推定される地点の発掘調査はできなかったが、N36E26区およびN32E26区の巾2mの発掘区の地層をみると、地表面の傾斜とともにⅡ層上面は発掘区北端で+42cmに南端で-10cm、Ⅲ層上面は北端では確認できないが、+10cmがⅢ層になっており、南端では-25cmにⅢ層上面がある。これら地層の傾斜とそのレベルをみると礫石番号3とした栗石の地形が両端を示していると考えられる。東西の広がりについては西側が家屋のため、その広がりを確認することはできない。

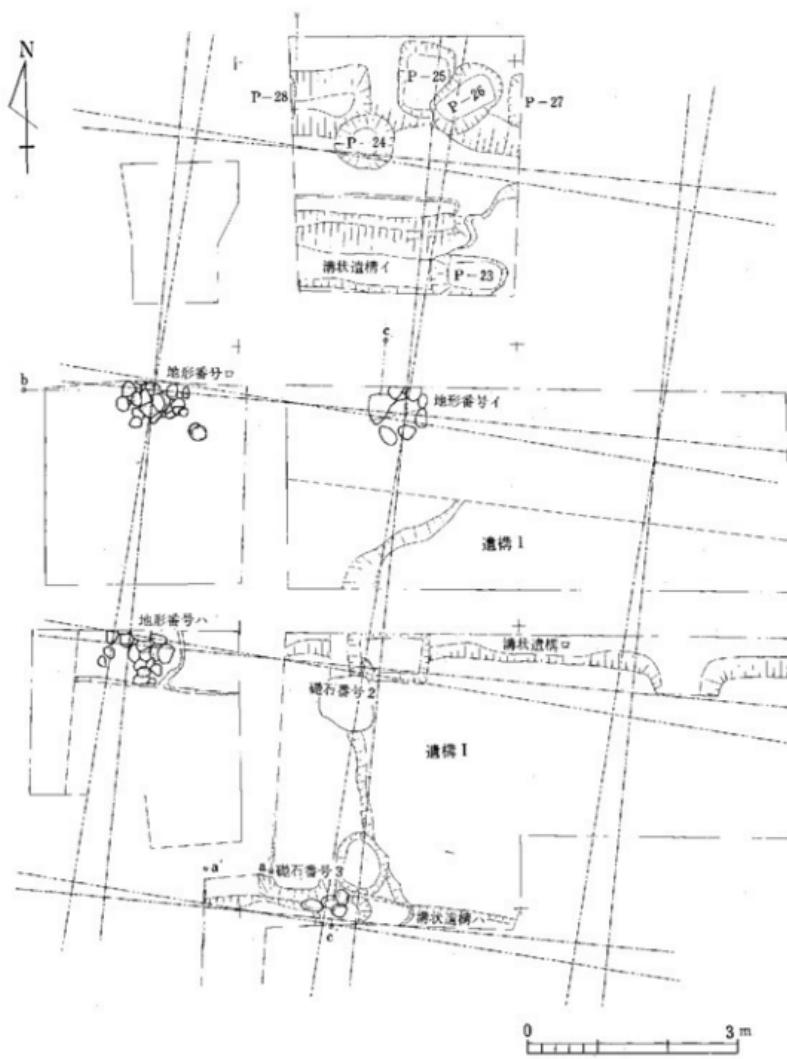
これらよりこの礫石群AはB軽石の噴出後に築造されたものであり、その規模は南北3間として、各柱間を300cm(10尺)にとり、東西は何箇か現状では不明であるが、一番東の柱間は390cm(13尺)とする建物の礫石および地形と考えられる。

### (3) 磚石群B

磚石群Aの各礫石に近接する位置で、Ⅲ層中あるいはⅢ層上面に設置されている数個の栗石からなる地形が3箇所で確認されている。これらは磚石群Aの礫石番号1・4・5の北東に近接しており、それぞれ記述上の地形番号をイ・ロ・ハとする(掉図5参照)。地形番号イ～ハ各々の栗石の並び方および傾斜等の状態から礫石の位置および中心を推定し、それぞれの位置関係と合せて直角方向を見ると、地形番号ロを起点としてイとハが直角となり、その距離は両者とも260cmである。地形番号ロ・ハの方向は北5.5度東と測定され、磚石群Aの方向と一致してくる。各栗石の地形の規模・レベル・地層との関係および埋め土の状態は表2のとおりである。

地形番号	栗石の最大範囲	推定中心点からの範囲				栗石レベル		地層上面	埋め土	備考
		北へ	南へ	西へ	東へ	Ⅲ層上面	Ⅲ層下辺			
イ	91×90	37	34	51	36	+6	-22.5	+5	-4	Ⅲ層
ロ	106×70	9	47	44	52	-4	-29	+1	-25	Ⅲ・Ⅳ層の混土
ハ	105×85	21	18	31	64	-1	-34	+2	-7	Ⅲ層

表2 磚石群Bの栗石の範囲・レベル・地層との関係(数値の単位はcm)

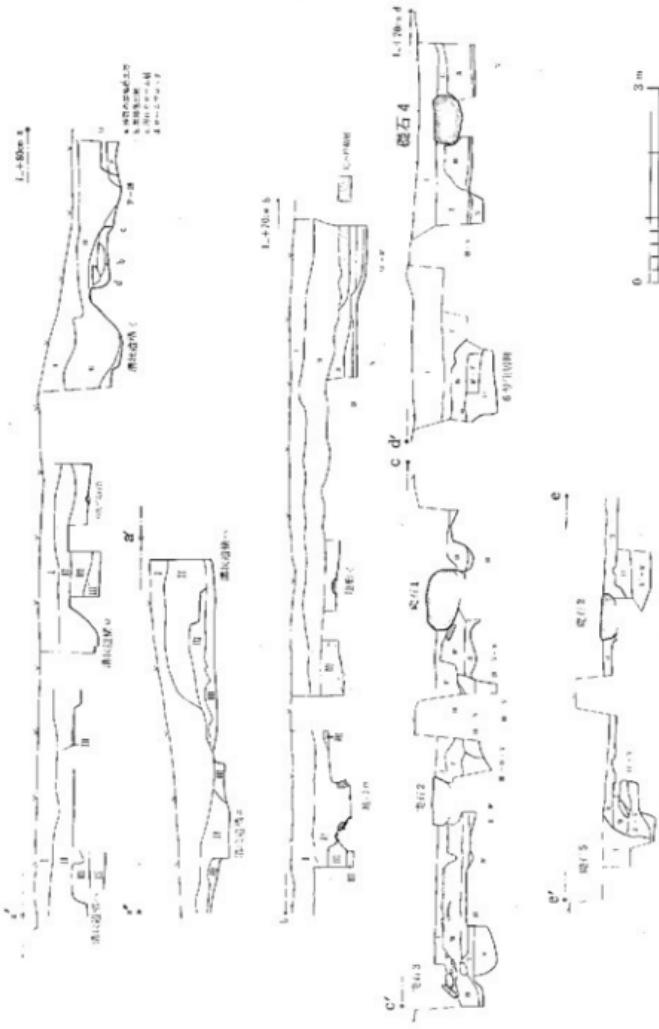


桿圖5 碎石群B 平面実測図

これら栗石の上には礎石が設置され、建築物の基礎を構成していたものと考えられ、建物が何らかの原因で崩壊した後に、これら礎石も取り除かれたものと推測される。地形番号イは数個の栗石の上をⅢ層が直接埋めており、地形番号ロはⅢ層上面から掘り込んだ形でⅡ層とⅣ層との混土が埋めている。地形番号ハは栗石の上をⅢ層とローム粒の混土が埋め、その上をⅢ層が覆っている。発掘調査はこの栗石を出す面ではほとんど止めており、これら栗石を設置するための掘り形は調査していないが、ハの栗石の南端はさらに掘りさげており、それによると掘り形と推定されるものが見られる。これらの状態からすると地形番号ロの礎石が取り除かれた時期がもっとも遅く、Ⅱ層がある程度堆積した後と考えられ、地形番号イとハはそれ以前に取り除かれて、Ⅲ層が覆ったとみられる。地形番号ハの掘り形と見られるものはC軽石の入る黒色土のロームブロックとの混土が埋めしており、掘り込み面と推定される面は焼上に覆われておらず、明らかにはできなかった。また、地形番号イ・ロは掘り込み面は確認していないが、イの栗石はⅢ層に類似したC軽石を含む黒色土面にのっており、ロではⅢ層が栗石の近くで確認されているが、レベルから見るとⅢ層より上にあがっている栗石もあった。礎石を取り除く際に多少移動した栗石もあるのではないかと考えられる。これらの状態からするとこの3つの地形が設置された時期はⅢ層以前であり、Ⅲ層あるいはそれに類似した上層のC軽石を含む黒色土の堆積後とみられ、礎石群Bとした地形はほぼ同じ基礎の上にあり、同一建築物の地形と考えられる。

本年度の発掘調査で明確となった相関連する地形はこの3つであるが、地形番号イの南360cmで、ハの東360cmの地点付近にはハの掘り形とほぼ同じ状態のピットが一部発掘されている。このピットの周辺には礎石群Aの礎石番号2が重複しており、Ⅲ層下には明らかにはできなかったが上部器を伴なう遺構1がさらに重複している。地層の状態はⅢ層下に遺構1を埋めているC軽石を含む黒色土と漸移層との混土があり、その上面からこのピットは掘り込まれている。埋めている土はこの掘り込み面の上とロームブロックとの混土である。これも同一の建築物の地形をなしてくるものとすると、一部しか発掘していないが、中心はかなり西によっており、前の地形番号イ～ハの地形の関係の中で方向が北10度東と変ってくる。また、地形番号イ～ハの中心も多少ずれてきて、イは南、ロは北、ハは西北におのおの9～18cm寄ることになる。地形番号イ～ハも栗石の地形だけで、しかも地形の全面を掘り出してないものもあり、中心を推定すること自体かなり無理があるので、あるいは可能な範囲とも考えられる。一方このピット以外にはこの付近では同一の地形と推定できるものは発見できなかった。仮りにこのピットを除外すると地形番号イ～ハの関係では建築物を推定しにくくなり、八角堂等を配慮しても、地形間の関係あるいはそれを補填して建築物を形成し得るような地形にはならない。さらに地形番号イの南720cmの地点付近は前述の礎石群Aの礎石番号3とはほぼ重複し、溝状遺構も重なっている。これらのため明確にすることはできなかったが、栗石の地形である礎石番号3の下部にはほぼⅢ層上面から掘り込まれ、Ⅲ層で埋めているピットがある。このピットは方向・距離・地形および地層の状態からすると同一の地形とみられるが、レベルが-21cmから掘り込まれ、-50cmにいたっている。栗石の厚さが他では10cm前後であり、掘り形の底から栗石をつめているとすればやゝ深すぎる。しかし、ハの南端の断面と比較した場合、同一建築物の地形であった可能性はある。

栗石の地形番号イ～ハあるいは他の2つの地形を加え、方向と距離とを配慮しつつ、この周辺の状況を検討してみたが、関連する地形は明らかにはできなかった。地形番号ロ・ハの西および南は家屋のため発掘できず、イの南720cmまでは上記のとおりであり、その南はやはり上部が建っている。地形番号イとハの東360cmと720cmの付近では周囲をそれぞれ-16～-43cmと-6～-38cmまで掘り下げて調査したが、ピットは発見できなかった。これら地形番号イ列の東はⅢ層あるいはⅣ層も地表面およびⅡ層の傾斜に近い傾斜がみられ、イ列の東360cm付近でⅢ層上面は-7～-16cm、



補圖 6 磐石群 A・B の断面実測図

IV層上面は-39~-56cmになっている。地形番号イ~ハのレベルと比較するとかなり低くなっている。地形の存在した可能性は少ないと考えられる。地形番号イの北 360cm付近ではⅢ層上面が-40cm前後であり、周辺にいくつかのピットは発見されたが、位置・形態・埋め上等からみて、関連すると思われる地形は検出できなかった。

礫石群Bの柴石の地形は地形番号イ~ハであり、他にイの南 360cmにも地形があったと推定され、さらに南 360cmにも地形のあった可能性がある。これらの地形はほとんどⅢ層下にいたりはじめて明確になったものであり、他の遺構との重複関係もあって、今年度の調査ではこの遺構面を面として広げて調査することは不可能であった。調査範囲内ではⅢ層堆積後に焼造され、イ列を最東端として、西へ広がるように推定される。南北はイの南 720cmが、Ⅲ層あるいはIV層からみて、南端である可能性は強く、北端については確認できなかった。以上のように礫石群Bは建物の規模を推定するにはいたっておらず、柱間一間を 360cm (12尺) とする建物の地形を 3~5 個所確認したにとどまる。

なお、N44E30~N40E30区の周辺で、Ⅲ層上面を中心として、面をなして瓦の堆積があり、さらにⅡ層中、あるいはⅢ層中にも瓦の堆積がみられたが、地層からみるとこれら瓦の堆積と礫石群AあるいはBとの直接的な関係はないようと考えられる。

#### (4) ピット群

前記のように、ピットは便宜的に礫石群の東 (E34以東)・北 (N44以北) の 2 グループに分けられる。

##### 礫石群東のピット (挿図 6・図版 4・5・6)

ピットは大別して、壁の走向が磁北から西にずれ、遺構確認面がIV層上面のものと、壁の走向が磁石からやや東にずれ、遺構確認面がⅢ層上面のものとに分けられる。

各ピットの現状における形状・規模等についてみると表3のとおりである。

これらのうち、壁の走向が磁北から西にずれ、Ⅲ層上面を遺構確認面とし、ピット内に大量の瓦片を出土するものにピット-6・7・8・9がある。これら4つのピットはいずれも掘り形内に径 30~45cm の柱穴底が認められ、その底は-155~-176cm を計る。ピット内の埋土は、ピット-8ならびに9は、柱穴底内、柱穴痕と掘り形間および柱穴痕下の地形の土にB軽石を量的には差があるが混入しており、ピット-6・7はサラサラした砂質のものが混入している。ピット-6・7と8・9とは、形状および深さなどに若干差があることに問題があるが、孤立柱からなる同一の遺構—柱穴状ピット群1—に係わるピットと思われる。柱穴痕心距離は東西 180cm、南北 450cm、南北の走向は磁北から 7.5 度東である。制約されたグリッド内の観察であるが、南および西に連続する形で、これら4つと同じ性格のピットは認められない。おそらく北への広がり方が問題になると思われる。ピット内の出土遺物は瓦片が中心であり、他に須恵器片・土師器片などが若干出土している。土なものとして、ピット-7の三重弧文軒平瓦 (軒平No.5・図版10-5)、ピット-8の複弁4葉軒丸瓦 (軒丸No.4・挿図12-4)、単弁4葉軒丸瓦 (軒丸No.10・図版9-13)、ピット-9の三重弧文軒平瓦 (軒平No.6・図版10-6) などがある。

次に、壁の走向が磁北から西にふれ、遺構確認面がIV層で、Ⅲ層にロームブロックが混入する層が埋土となっているものに、ピット-1・3・4・5・12・13・14・17・19・20がある。特にピット-20・1・3・14・4・5・17・19は、南から北へ列をなしており、ピット-12・13はこれらのピット列の東に平行する位置にある。また、ピット-11・15はIV層が遺構確認面で、ピット-20からピット-19のピット列内にあることから、このピット列と同じ性格のものと考えられる。いずれのピットも石が使用された形跡ではなく、平面は矩形で、壁が磁北から 20~25° 西にふれている。ピッ

表3 磨石群東の各ビ

事項 ピット番号	形 状 お よ び 規 模								深さ	長軸の走向	
	上 線		塔 線		レベル		底 線				
	南北	東西		南北	東西		南北	東西	レベル		
ピット-1	隅丸長方形	90 □	100 □	-62	□	隅丸方形	90 □	90 □	-143 □	81	北-23°-西
-2	楕円形	190	140+α	-62	楕円形	150	100	-128	66	北-30°-東	
-3	隅丸方形	99	106	-60	隅丸方形	85	82	-130	90	北-24°-西	
-4	隅丸長方形	89	107	-60	隅丸長方形	62	69	-123	65	北-20°-西	
-5	長方形	85	105	-70	長方形	70	85	-123	54	東-24°-北 (北-24°-西)	
-6	不正矩形	134	136	-92	隅丸長方形	85	110	-157	65	東-20°-南 (北-20°-東)	
-7	隅丸方形	130	T29	-70	隅丸方形	92	95	-176	106	東-4°-南 (北-4°-東)	
-8	隅丸長方形	200+α	118	-74	隅丸長方形	175	70	-218	144	北-15°-東	
-9	隅丸長方形	173	150+α	-78	隅丸長方形	140+α	108	-211	133	北-11°-東	
-10	隅丸方形	86	78	-54	隅丸方形	80	58	-123	69	北-8°-西	
-11	隅丸長方形	80	130	-54	隅丸長方形	74	118	-117	63	東-24°-北 (北-24°-西)	
-12		50+α	50+α	-82		49+α	45+α	-112	30	北-25°-西	
-13		50+α	-97			50+α	40+α	-112	15	北-25°-西	
-14	長方形	66	90	-52	長方形	60	81	-105	53	北-23°-西	
-15	長方形	56	65	-56	長方形	53	85	-102	46	東-22°-北 (北-22°-西)	
-16	長方形	96	-69	長方形	94	72	-90	21	北-21°-西		
-17	長方形	75	90	-54	長方形	65	74	-109	55	東-21°-北 (北-21°-西)	
-18	不整長方形	67	-54	不整長方形	90	40	-82	28	北-26°-西		
-19		105	-64			25+2	70	-120	56	北-22°-西	
-20		55	-56			54+2	45	-108	52	北-25°-西	
-21	円形	890	890	-70	円形	—	873	-90	20	—	
-22	円形	—	860	-79	円形	—	835	-95	17	—	

表4 磨石群北の各ビ

事項 ピット番号	形 状 お よ び 規 模								深さ	長軸の走向
	上 線		塔 線		レベル		底 線			
	南北	東西		南北	東西		南北	東西	レベル	
-23	不整長方形	60 cm	108 cm	-50 cm	長方形	38 cm	74 cm	-90 cm	40 cm	東-4°-南 (北-4°-東)
-24	円形	—	185 cm	-41	円形	—	185	-100	59	—
-25	長方形	115	80	-40	長方形	75	65	-86	46	北-10°-東
-26	長方形	115	68	-42	長方形	80	40	-108	66	東-32°-北 (北-32°-西)
-27	不定矩形	75	21+α	—	—	—	—	—	—	北-5°-東
-28										
-29	推定長楕円	90	35+2	-14	椭円	40	20+α	-93	79	北-17°-西

ットの形状および規模

ピットの掘り方	造構 確認面	ピット内埋土	備考
直	水平	IV層上面 Ⅲ層とロームブロックの混土層。	底に40×70cm、深さ24cmのピットあり。ピット-20と切り合う。ピット-20が新しい。出土遺物瓦片4・土器器片13。
直	水平	上半、Ⅲ層にロームブロック混入。 下半、ロームブロック層。	
直	水平	Ⅳ層上面 Ⅲ層とロームブロックの混入。	ピット-14と切り合う。ピット-14が新しい。 出土遺物 瓦片7、土器器片10。
直	水平	上半、Ⅲ層 下半、Ⅲ層にロームブロックを混入。	柱穴底あり。径15cm。
直	水平	Ⅲ層にロームブロックを混入。	出土遺物、瓦片8、土器器片2。
直	水平	Ⅲ層上面 Ⅲ層にロームブロックを含む砂層の層、しまっている。柱穴底、Ⅲ層にロームブロックを含む層。	柱穴底あり。径30cm。西壁に接して幅80cm、深さ25cmのピットあり。出土遺物、瓦片60、須恵器片3、土器器片2。
直	水平	Ⅲ層上面 Ⅲ層にロームブロックを混入。 柱穴底、Ⅲ層にサラサラした砂層を含む層。	柱穴底あり。径42cm、底の堅膜寄りに、径44cm、深さ5cmのピットあり。出土遺物、瓦片50、土器器片5。
直	水平	Ⅲ層上面 Ⅲ層を主体としてロームの小粒を含む層。 柱穴底はⅢ層にB種石を含む。	柱穴底あり。径30cm。柱穴底の下端レベル-167cm。出土遺物、瓦片150、須恵器片3。
直	水平	Ⅲ層上面 Ⅲ層にロームの小粒を少量含む。 B種石を含む。	柱穴底あり。径45cm。柱穴底の下端に栗石4ヶを露認栗石の上端レベル-165cm、下端-165cm。 出土遺物、瓦片80、土器器片1、須恵器片2。
直斜 中央がくぼむ	水平	Ⅲ層上面 柱穴底はバサバサした土。他の部分はⅢ層を主体としてロームブロックを含む。	柱穴底あり。径8cm。 出土遺物、土器器片2、須恵器片1。
直	水平	IV層上面	
直	水平	IV層上面 Ⅲ層を主体として、ロームブロックを混入。	ピット-9と切り合う。ピット-9が新しい。
直斜	水平	IV層上面 Ⅲ層とロームブロックとの段土層。	
直	水平	IV層上面 Ⅲ層を主体にロームブロックを混入。	P-3と切り合う。ピット-14が新しい。
直	水平	IV層上面	
直	水平	IV層上面 Ⅲ層にロームブロックを混入。	
直斜 底の中央がくぼむ	水平	IV層上面 Ⅲ層にロームブロックが少量混入。	柱穴底あり。径30cm。 柱穴底5cmと切り合う。ピット-19が新しい。
直	水平	IV層上面 Ⅲ層にロームブロックを混入。	P-1と切り合う。ピット-20が新しい。
		Ⅲ層上面 Ⅲ層	

注 (1) 長軸の走向は壁北からの角度をあらわす。

(2) レベルは最高点からの高さをあらわす。

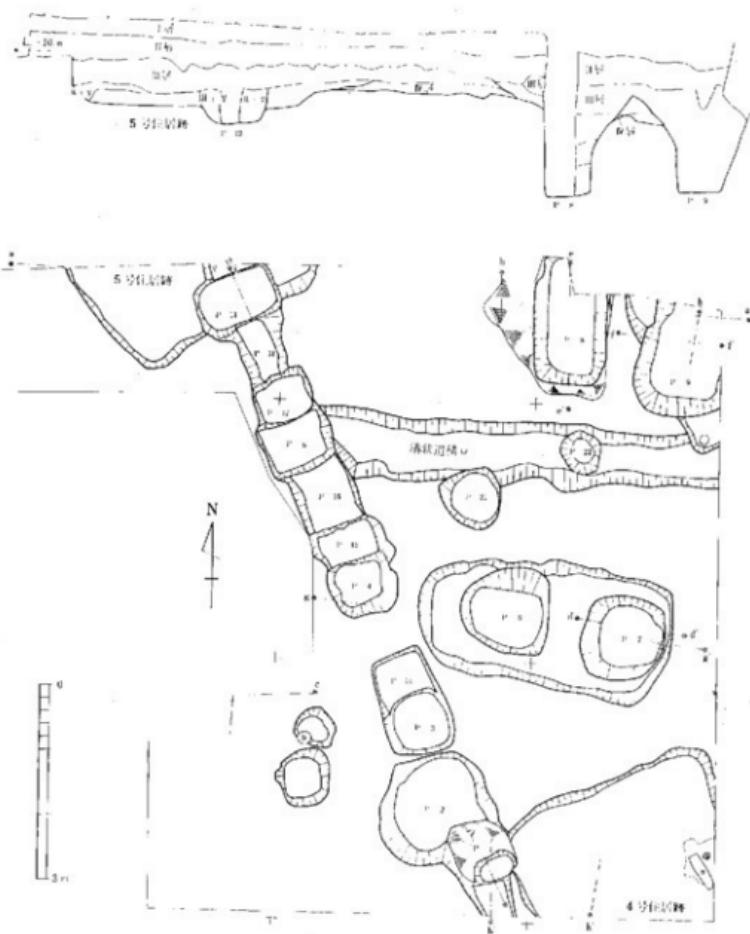
(3) 備考欄の出土遺物はピット内の埋土から出土遺物である。

ットの形状および規模

ピットの掘り方	造構 確認面	ピット内埋土	備考
斜	水平	Ⅲ層とロームの混土層。	
直	水平	柱窓はⅢ層。他のロームブロックを含む 黒色土。	P-27と切り合う。P-26が新しい。
		上、黒かっ色土、ロームブロック。 下、ロームブロック。	
斜	Ⅲ層	B種石を含む黒かっ色土。	
直斜	水平	上、Cを含む黒かっ色土。 下、ロームまじりの黒かっ色土。	

注 (1) 長軸の走向は壁北からの角度をあらわす。

(2) レベルは最高点からの高さをあらわす。



插図7 崎石群東のピット群平面及び北側断面実測図

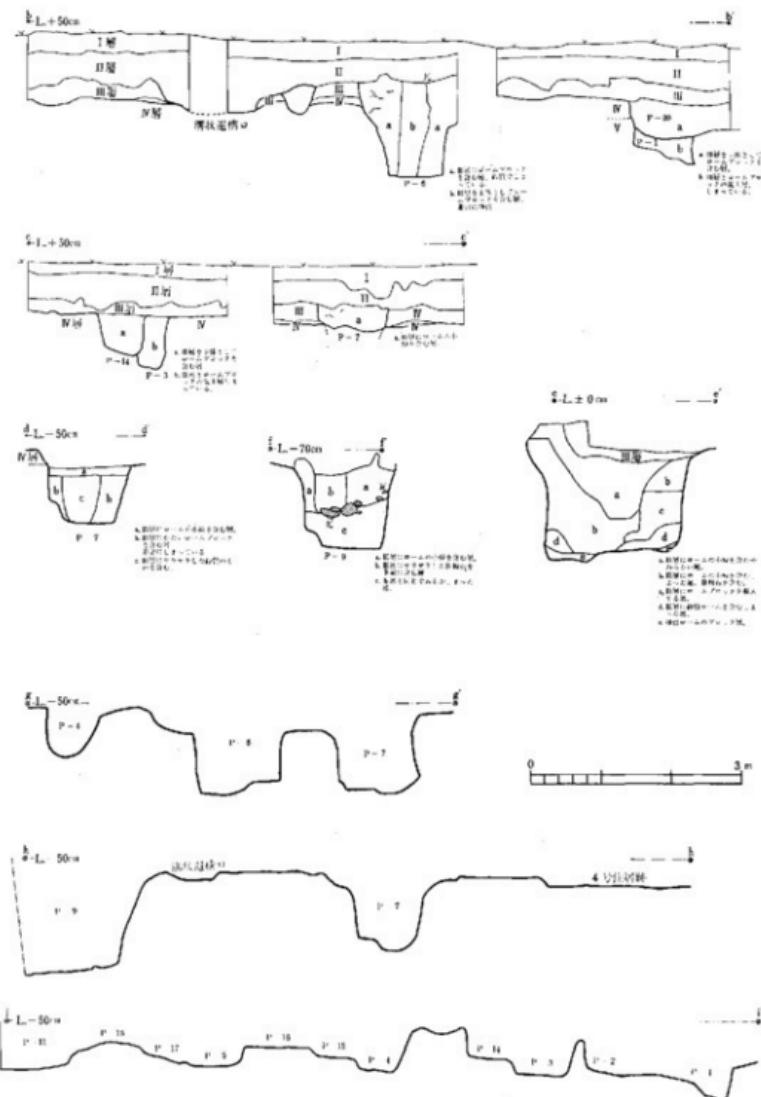


図8 碳石郡東のピット断面実測図

ト列の内、ピット-20と1・ピット-3と14は、地層断面（挿図7・8）からピット-1と3が古く、その2ピット間の心心距離は240cmを計る。この北にピット-4・5・11が240cmの間隔で連続し、西壁底は一直線上にのり磁北から26°西にふれている。ピット-12はピット-4の東6mに、ピット-13はピット-5の東6mの点からやゝ南に位置している。また、昭和50年度調査Aトレントピット-1（図版13）は、ピット-12・13の延長線上にあり、ピット-12から南へ720cmの位置にある。その走向は磁北から26°西にふれている。ピット-1から、ピット-1・3・4・5・11の柱列延長線上に下した垂線との交点は、ピット-1から南へ240cmの地点になる。ピット-1・3・4・5・11・12・13およびピット-1は、形状は矩形を基本とし、底のレベル平均-124cm、壁高平均63cmであり、おそらく同一平面上の掘立柱の遺構—柱穴状ピット列1—に関係するものと思われる。柱穴状ピット列1のピット-11に接したピット-19（挿図7）には、径30cmの柱穴底が認められる。このピットを中心にして南へ240cm間隔でピット-17・15・14と並び、ピット-1と2の重複する部分へと連続するようである。この5つのピットと柱穴状ピット列1とを比較すると、形状においてほぼ同じであるが、底のレベルで平均10cm高く、壁高で10cm低く、平均55cmを計る。磁北との関係は2ずれが小さく24°西である。これらピット-19・17・15・14・1～2も、同一平面上の掘立柱の遺構—柱穴状ピット列2—と思われる。柱穴状ピット列1と2の新旧関係は、ピット-3と14の地層断面からピット-3が古いことは前記のとおりであり、ピット-3が構成する柱穴状ピット列1が時間的に古いことになる。しかし、埋土やピットのあり方からして、時間的に大きな差は考えられない。また、柱穴状ピット列2のピット-19は、5号住居跡の埋土である黒味の強いⅢ層を切り込んでつくられていることから、柱穴状ピット列の構築時には黒味の強いⅢ層が存在したのであり、Ⅳ層が当時の生活面とは考えられない。

#### 礎石群北のピット（挿図4・5、図版7）

礎石群北のN48E30区（3.4×3.8m）、N48E26区（2×15m）は、道路敷であることや、溝状遺構イ、さらには、抜かれているが礎石群の北辺と推定されることなどから、複雑な様相をみせている。

ピットは7個検出されたが、調査範囲が狭いことと、地層が複雑なために、壁の走向、遺構確認面ならびに埋土などからピットの分類は不可能である。各ピットの状態は表4のとおりである。

以上の内、ピット-25ならびに28は、B軽石を含む土層が埋土となっている。これは柱穴状ピット群1のピットと同じ埋土であるが、その関係は明らかにしがたい。

#### （15）溝状遺構

##### 溝状遺構イ（挿図4・6、図版7）

この溝はⅢ層が遺構確認面で、溝の下半はⅡ層が、上半は瓦破片を多量に含み、礎あるいは破碎された石を少量含むⅡ層が埋土となっている。溝の掘り方は傾斜のなだらかな「U」字状である。幅約130cm、深さは40～60cm、底のレベルは西端で-61cm、走向は東-4°～南を計る。今回の調査では5.7mの長さが確認されたが、昨年度調査のBトレント内で検出された東西の溝に続くものと思われる。昨年度の溝と今年度検出された溝を結ぶと東-10°～南となる。

この溝中から昨年同様多量の瓦破片が出土している。土なものをあげると、素弁葉軒丸瓦（軒丸No.2・図版9-2）復弁葉軒丸瓦（軒丸No.5・図版9-4、軒丸No.6・図版9-5、軒丸No.7・図版9-7）、三重弧文軒平瓦（軒平No.7・図版10-7、軒平No.9・図版10-9、軒平No.10・図版10-10、軒平No.11）、縦齒状文軒平瓦（軒平No.15・図版10-15）、縫杉状文軒平瓦（軒平No.16・図版10-16）、唐草の押きのある平瓦（図版10-18）などがある。

#### 溝状遺構口（挿図5・6）

溝状遺構の中心から南へ約4.7mの位置に底の中心がある。この溝はⅢ層上面から掘り込まれ、Ⅱ層が埋土となっている。溝の幅は75~150cm、深さは26~37cmで、西が深く、底のレベルは西端で-22cm、東端はそれより57cm低くなっている。掘り方は傾斜のながらかな「U」字状で、東西約22mまで検出され、東は昨年度調査したAトレンチ北辺の浅い溝につづくと思われる。溝の走向は東-5°-南を計る。主な出土遺物として庶草文軒平瓦（軒平版17・図版10-17）がある。溝状遺構口に比較して遺物の量は少ない。

#### 溝状遺構ハ（挿図5・6）

溝状遺構口の南約4.6mの位置に東西に走る。Ⅲ層を掘込み面とし、Ⅱ層が埋土となっている。溝の幅は130cm、深さ21~35cm、底のレベルは-20cm前後である。掘り方は前2者と同様傾斜の緩い「U」字状で、溝の走向は東-4°-南を計る。これを東に延長したN36E38~46区の断面および平面に溝は認められず、途中で終っている可能性がある。溝は長さ約4.4mまで確認されている。溝内の出土遺物は少ない。

#### 溝状遺構ニ（挿図6）

溝状遺構ハの南3.7mの位置で東西に走るが、幅1mのトレンチ内で確認されたのみである。前3者と同様Ⅲ層が掘り込み面となり、埋土はⅡ層である。溝の幅110cm、深さ35cm、底のレベル-60cmを計る。走向は東-6°-南である。溝内埋土中からの出土遺物は瓦破片が中心であるが、溝状遺構口・ハに比較して多く出土しており、溝状遺構にその状態は近似している。

これらの溝は、礫石群の北辺・中間・南辺および南側を東西に走り、特に水が流れた形跡は認められず、また建築遺構に直接関係するものとも考えられない。

#### (6) 壁穴住居跡

土師器を伴う壁穴住居跡は、N36E46区、N44E38区およびN40E26区にそれぞれ1軒、計3軒の存在が確認された、いずれもグリッドの関係で完掘はできなかった。

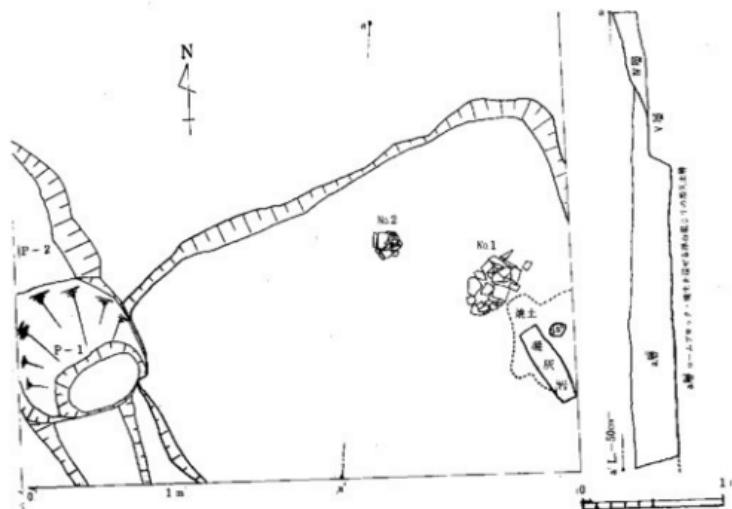
##### 4号住居跡（挿図9・図版8）

住居跡の北壁を検出した。IV層を遺構確認面とし、Ⅲ層が埋土となっている。平面は矩形で、東壁に竈がある。壁下に周溝はない、また調査範囲内では柱穴も認められない。規模は、全長を計り得る北壁で345cm（床面で326cm）あり、東壁および西壁は70cm・140cmである。現壁高は22~26cmで、北壁の走向は東-23°-北（北-23°-西）である。

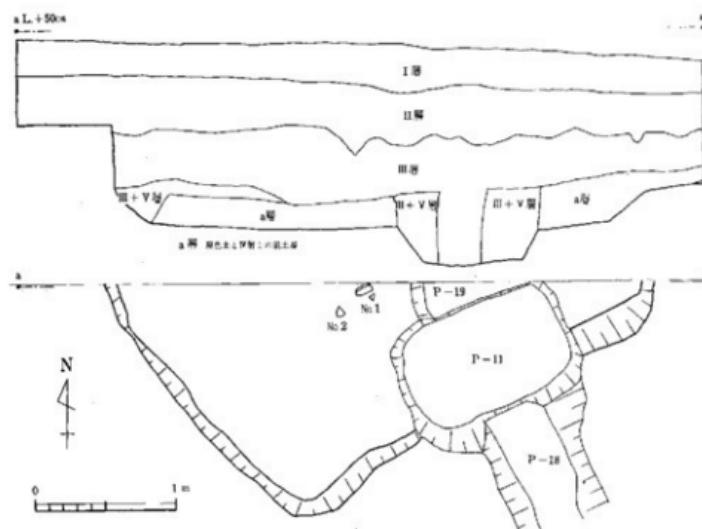
竈は北東隅から約1.7mの位置に中心があり、壁から住居内に40cmの長さに造り出され焚口幅は40cm、火床には石の支柱が立っている。壁体は白色粘土で築かれているが、焚口には石材が使用されている。特に焚口の冠材は、58×19cm厚さ8cmの凝灰岩の切石であり、原位置から床面へすり落ちた状態で検出された。なお煙道部は未調査である。出土遺物に土師器の長甕形土器（挿図18-1・図版12-10）小型甕形土器（挿図18-2・図版12-11）环形土器（挿図18-3・図版12-12）がある。長甕形土器は竈の北西には接し、小型甕形土器は竈の北西1.2mの位置に、床面から出土している。环形土器は埋土中からの出土である。

##### 5号住居跡（挿図10、図版8）

南西隅が検出され、他の部分は未調査である。遺構確認面はIV層であり、埋土はⅢ層よりやや黒色の強い土が床から20~30cm堆積している。平面は矩形が推定される。壁直下には周溝ではなく、調査範囲内には竈および柱穴は認められない。壁は南西隅から、南壁はほぼ全長がわかり3m、西壁は2mまで計測できる。壁高は24cmで、南壁の走向は東-32°-北（北-32°-西）を計る。出土遺物の主なものに土師器の环形土器（挿図18-5・図版12-13）、小型甕形土器（挿図18-4・図版12-



插図9 4号住居跡平面及び断面実測図



插図10 5号住居跡平面及び断面実測図

-14) がある。いずれも床+面からの出土である。この住居跡とピット-II・19重複しているが、ピット-19について、地層断面(拡図7)からして住居跡が埋没した後に掘られたものであり住居跡が古いことが明らかである。

#### 6号住居跡(拡図11)

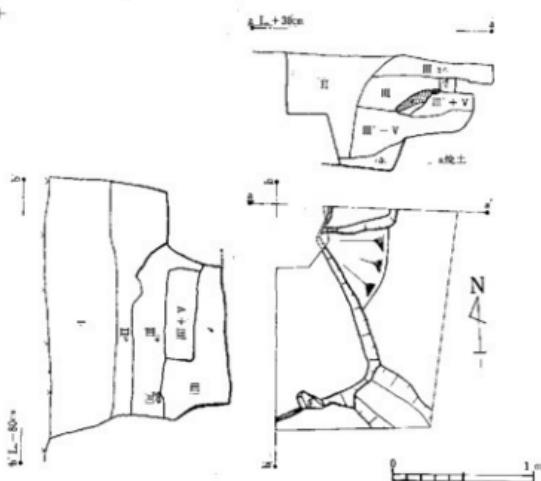
南東隅が確認され、他は宅地に隣接するため未調査である。IV層を造構確認面とし、III層が埋土となっている。平面は矩形とみられ、東壁に竈がある。壁直下には周溝ではなく、柱穴も調査範囲内では確認されない。壁は東南隅から東壁は130cm、南壁は75cmまで確認でき、

北壁は37cm前後である。東壁の走向は北-22°-西を計る。竈は南東隅から約1.3m付近にあり、焼土が堆積した掘込みが住居跡外へ急傾斜で立っている。しかし竈は礫石群A-5ならびに礫石群B-1ハの地形により破壊されており、その構造を明らかにすることはできない。又住居跡南東隅から南へ、幅40cm深さ29cm前後の溝があり、底に焼土が認められる。しかし床面から20cm高い位置にあることなどから、住居跡に関係ないものと思われる。出土遺物は床面につくものはなく、埋土中から小型彫形土器(拡図18-16、図版12-15)が出土している。一方6号住居跡と礫石群A-5とは重複関係にあるが、地層断面(拡図6)からして6号住居跡が古い。

#### (7) その他の遺構(拡図5)

##### 遺構1

N40E30区、N44E30区の礫石群A・Bの下に、性格不明な遺構がある。グリッドの関係で完掘はされてないが、III層を掘り込み面とし、IV層とV層の混土層を埋土としている。壁は東西方向に走る北壁と、南北方向に走る西壁が確認されている。西壁南端は東に曲りはじめており南西隅に近いと思われる。北西隅はセクションベルトの関係で不明であるが、北壁は2.4mまで確認でき、西壁は4.3mを計る。壁高は約15cmであるが、北壁は東に行くにしたがい低くなり不明瞭になる。西壁の走向は磁北から15°西、北壁は東から25°北にずれ、隅の角度は直角より大きい。掘り込まれた底はレベル-46~-54cmで、ほぼ水平であるが、土は硬くしまってない。遺構内北壁寄りに4個のピットがあるが、その形状からして柱穴とは考えられない。出土遺物は底に接して土師器の破片が少量出土している。遺構1は以上のようなであるが、住居跡と考えるのには若干問題があるが、人為的なものと考えられる。



拡図11 6号住居跡平面及び断面実測図

### 3. 遺 物

本年度の発掘調査で出土した遺物は、ダンボールみかん箱にして約60箱分にのぼり、その大半を瓦が占めている。瓦のほかには、鉄製品・土器等がある。現在、整理が完了していない段階であるので、本稿においてそのすべてについてふれることはできない。主なものについてのみ、以下、3項目にわけて記述する。(1)では瓦類を扱い、(2)では金銅製品・鉄製品・上器その他寺院と関連するか否か判明しないものも含めて扱い、(3)では明らかに住居跡内出土と認定されたものののみを扱った。なお、これら遺物の出土地については、1.2.調査目的・方法で示した4m四方の範囲で取りあげている。

#### (1) 瓦 類

出土瓦のはとんどは、小破片となっていて完形のものはないが、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦等各種にわたっており、文字の認められる文字瓦もある。これらの瓦のうち特色のあるものについて示す。

① 軒丸片 (挿図12-1~12, 図版9-1~13)

④ 素弁蓮華文瓦 №1

(挿図12-1, 図版9-1)

瓦当面の4分の1ほど残存。周縁のすぐ内側から中房に向って幅1~2mm前後の低い隆起線があり、その隆起線によって周縁で閉まれた内部を区分けし、花弁としている。隆起線は3本しか残していないが推定弁数は8葉である。中房部は欠失して不明である。瓦当表面には細かい粘土鐵が認められる。周縁は、縁高1cm、縁幅1.2cm、直立・高縁である。瓦当径は推定20cm前後であり、厚さは中房に近いところで1.5cmである。瓦当裏面には、接合した丸瓦が剥落した痕跡が認められる。丸瓦との接合部以外の裏面は、荒いヒラ削りの整形が行なわれている。胎土、焼成とも普通、色調は外面が灰白色、内部が灰褐色である。N44E42区Ⅲ層中出土。

№2 (挿図12-2, 図版9-2)

瓦当の3分の1ほど残存し、周縁の一部と花弁2葉半がみられる。中房部は欠失している。花弁端円型反転型式で、花弁の周縁には輪郭をつけている。苞で文様をついているが、この瓦では、その苞が少しづれており、2度押された形態をとどめている。全体に文様の作りは雑であって、花弁端の反転は浅く、弁尖の後線も判然としない。この瓦と同種の瓦はすでに完形の瓦当面が本遺跡で発見されている<sup>(注1)</sup>。それによれば、花弁数は8葉であり、本例も同様は8葉と推定される。周縁は素文縁であるが、花弁に近い内側で一段下がっている。縁高2.2cm、縁幅2~2.5cm、一段下がる内周部分の幅は0.6cmであり、直立・高縁である。裏面及び周縁外縁とそれに続く丸瓦凸面はていねいにナデ整形されている。胎土は多少の小石粒がみられるものの細かく焼成は堅緻であり、灰白色を呈している。N48E30区表土中出土。

⑤ 複弁蓮華文瓦

№3 (挿図12-3, 図版9-3)

瓦当面の4分の3が残存し、中房も完全に残っている。全体に文様の彫りが深くくっきりと出ている。花弁は、複弁7葉で弁長3.6cm、弁幅3.1cm、子葉長1.8cmである。子葉長は弁長のはば2分の1の割合である。弁尖は棱をなし、ゆるやかに曲線を描いて反転する。花弁は弁尖の後の両側で幾分くほんでいる。中房は径4.3cm、高さ0.4cm、蓮子は1+4+8の構成で計13個である。中房の大きさは比較的小さく、その径は内区径のはば3分の1程度である。周縁は素文縁で、縁高1.1cm、縁幅2.2~2.7cmとかなり幅広の直立・高縁である。周縁の表面は幾分内区寄りに傾く内斜面となっている。瓦当の厚さは中房の中心部で2.1cmである。裏面には、丸瓦との接合部に剥離



插図12 軒丸瓦拓本及び断面実測図

痕が認められる。また、裏面及び周縁外面にはナデ整形が認められる。胎土は細かく焼成堅緻であり、暗灰色を呈し石のような地肌をみせている。N44E42区Ⅲ層中出土。

No 4 (挿図12-4)

花弁2分の1と周縁の一部と丸瓦部の一部残存。花弁は2分の1しか見えないが、複弁蓮華文と判断できる。弁長は計測不能であるが、弁幅 3.1cm。周縁は素文縁で、縁高 0.8cm、縁幅 1.6cm で直立・高縁である。周縁上には指紋のあとが錯綜しており、指で押して形を整えたものとみられる。裏面はていねいにナデ整形され、そのナデは丸瓦凹面へ連続している。丸瓦凹面は裏面から4cmくらいのところまで横方向にナデ整形されている。ナデが終わったあたりで破損しているが、そのあたりから布目痕が見えはじめている。凸面も周縁のふちから横方向のナデがみられる。胎土は細かく焼成堅緻である。外面は灰青色、内部は灰褐色及び灰青色である。N44E46区ピット-8の埋地中出土。

No 5 (挿図12-5、図版9-4)

花弁2葉とそれに続く周縁の一部が残存。上記No 3と同種の瓦である。花弁は中房部寄りが欠損しているため定かでないが、弁長 4.3cm 以上、弁幅 4.2cm であり、No 3 に比して花弁の大きさがひと回り大きい。文様には粘土礫があるほか、全体に文様の凹凸が少なくだれた感じで、花弁の輪郭や弁穴の線はNo 3 ほど曲線的ではない。周縁は素文縁で縁高 0.9cm、縁幅 1.3cm と幅の狭い内斜面をなし、直立・高縁である。瓦当の厚さは花弁の中房部寄りで 1.4cm である。裏面にはナデ整形が施されている。胎土は細かく焼成堅緻で暗灰色を呈している。N48E26区表土中出土。

No 6 (挿図12-6、図版9-5)

花弁1葉半のみで、周縁・中房とも欠失。弁長 3.5cm 以上、弁幅 3.1cm。中央に稜をもち、先端で反転している。瓦当の厚さは中房に近いところで 1.3cm である。胎土は細かく焼成堅緻である。外面が灰青色、内部が赤褐色である。N48E30区Ⅲ層中出土。

No 7 (挿図12-7、図版9-7)

花弁1葉の3分の2とそれに続く周縁の一部が残存。周縁は素文縁で、縁高 0.9cm、縁幅 1.9cm、直立・高縁である。裏面に丸瓦が続くが、接合部のみであるとは欠失している。なお、裏面及び周縁はナデ整形が施されている。胎土は細かく焼成堅緻である。色調は外面が灰青色、内部が灰褐色を呈している。N48E30区溝中出土。

No 8 (図版9-6)

花弁1葉の先端とそれに続く周縁の一部が残存。花弁端から複弁と判明。周縁は素文縁、縁高 0.9cm、縁幅は 1.3cm、直立・高縁である。裏面は丸瓦に続くが接合部のあたりで丸瓦部が欠失している。胎土は細かく焼成堅緻である。外面が灰青色で内部が灰褐色を呈している。N44E34区Ⅲ層上面出土。

No 9

花弁1葉の先端とそれに続く周縁の一部が残存。弁尖に稜が認められ複弁とわかる。周縁は素文縁、縁高 0.9cm、縁幅 0.9cm と幅は狭い。直立・高縁である。胎土は細かく焼成堅緻である。色調は外面が灰青色、内部が灰褐色である。N44E42区Ⅱ層中出土。

◎ 単弁蓮華文瓦

No 10 (挿図12-8、図版9-13)

瓦当面の3分の2残存。中房と花弁2葉半、周縁の一部がみられる。瓦当面全体は、平坦な地の上に高さ 0.4cm くらいの隆起線で中房・花弁・間弁等の輪郭を形作っている。花弁は中房に接するところに最大幅があり、2.5cm である。弁幅は弁端にいくにしたがって細くとがってくる。弁長は 3cm である。子葉長は 1.5cm であり弁長のはば 2 分の 1 の長さである。間弁は、中房から T 字形に

伸びている。T字の横線は幾分弧をなしており、中房の中心にコンパスをあてて金弧を描くと各間弁のT字の横線が円弧上にのってくるようである。花弁数は4葉とみられる。中房は、4葉のせいか隅丸方形状であり、中の蓮子は中房の中心部に×印で省略化して表わしている。また、花弁の先端と周縁の中間には周縁とほぼ同心円を描くように隆起線がめぐっている。周縁は、素文縁で縁高0.2cm、縁幅1.9cmと低く、わずかに外傾している。周縁表面はわずかに外傾面を呈し、周縁の外側で裏面方向に向って広がる。瓦当面は極めて簡略化・形式化されている。瓦当裏面には布目圧痕があり周縁の真裏にあたる部分には、裏面の周縁ともいべき突帯があり、布目は瓦当裏面からその突帯裏面へと続いている。瓦当の厚さは中房部で1.6cm。胎土は小石粒を含みやゝ粗いが焼成堅緻である。色調は黒味がかった灰青色。N44E46区ピット-8の埋土中出土。

No11 (挿図12-9, 図版9-11)

瓦当の3分の1残存。No10と同じ系統の瓦。同じく隆起線で花弁の輪郭を形作っている。No10に比して瓦当の作りは荒れている。弁長3cm、弁幅は不明。周縁はわずかに外傾する素文縁で、縁高0.8cm、縁幅1.6cmである。瓦当の厚さは中房に近いところで2.8cmである。裏面はNo9およびNo10と同様な布目圧痕が認められ、裏面中央には布がよったような巻が認められる。胎土は細かく焼成堅緻・灰青色を呈している。N36E42区表土中出土。

No12 (挿図12-10, 図版9-12)

瓦当の3分の2残存。中房部は失なわれている。花弁は細い隆起線で輪郭のみを形作っている。花弁は、中ほどにその最大幅があり、先端にいくほどすぼまり、細くとがっている。弁幅は最大幅で3.8cmである。子葉も細い隆起線で表わされており、花弁端まで直線的に伸びている。花弁数は不明である。間弁はみられない。花弁端と周縁の間には2本の隆起線が同心円状に一周する傾向をみせている。そのうちの1本は、各花弁端に外接し、もう1本は前者と周縁の中間を走っており、この2本の隆起線で外区を設定している。外区の間隔は0.8cmであるが、特別な造作はなされておらず無文である。これら文様は、いずれも平坦な地の上に花弁・外区等を隆起線で表わしたもので、写実性は失なわれ形式化が進んでいる。こうした特色はNo10、No11と類似している。周縁の外側は裏面方向に向かって斜めに広がっている。裏面には布目圧痕が明瞭に残り、周縁の真裏にあたる部分には、やはり、裏面の周縁ともいべき突帯があり、布目が瓦当裏面からその突帯裏面へと続いている。胎土は細かく焼成堅緻で灰白色を呈している。N44E46区Ⅲ層中出土。

No13 (挿図9-10)

周縁と花弁との間の隆起線のみ残存。しかし、No10、No11と同系の瓦とみられる。裏面に粗い布目圧痕が認められる。胎土は小石粒を含みやゝ粗い。焼成堅緻で灰黑色である。N44E34区表土中出土。

No14 (挿図12-11, 図版9-9)

花弁1葉の半分のみ残存。同じく隆起線で花弁を形作っている。花弁は中房に近い方が幾分すばまっており、花弁中央部に最大幅があるとみられる。弁数等瓦当面の構成は不明。裏面はNo9～No12同様に布目圧痕がある。

以上のとおり、今次出土軒丸瓦は3分類で処理できるが、上記のはかの3片はいずれも周縁部の小破片であり、どれに属するか判定できない。これらのうちの2片は素文縁である。しかし、もう1片 (挿図12-12, 図版9-8) は周縁上に竹管の刺突が認められ、新知見である。この瓦の瓦当の構成等は全く不明であるが、裏面に布目痕は見られない。

② 軒平瓦 (挿図13-1～16, 図版10-1～17)

④ 素文

No1 (挿図13-1, 図版10-1)

素文段顎形式の一部。瓦当面には意的に施文した様子はない。幾条かの弱い沈線がみえるが、整形の際のものと思われる。瓦当の厚さは3cm、弧の深さは6.1cmであり、弧の深さが瓦当厚の約2倍あって、深い顎をなしている。割れ口から判断すると、平瓦の凸面側に粘土塊をつけたして顎部を作り、瓦当の厚さを出しているようである。凹面には布目痕が、凸面には横ナデ整形痕が認められる。胎土はやゝ小石粒を含むが緻密、焼成堅牢で灰青色。N40E30区Ⅲ層中出土。

#### ◎ 重弧文

##### No.2 (挿図13-2, 図版10-2)

二重弧文の一部。全体的に粗く粗糙な作りであって、瓦当面にも粘土の乱れが認められる。弧が凸面側に寄っているため、三重弧文であるかにみえるが、三重弧文とした形跡はなく、二重弧文である。凸面側に粘土をつけたして瓦当の厚さを出している。凹面は布目文の圧痕があり、棒に撻を兼ねて回転させたようである。凹面は布目痕がみえるが布が大きく破れており、布の糸が乱れている。側面は、ヘラ削りで整形されており、無顎形式のようである。胎土は緻密で焼成堅牢・灰青色である。N44E34区Ⅲ層中上而出土。

##### No.3 (挿図13-3, 図版10-3)

三重弧文の一部。ていねいに仕上げられ比較的整った瓦当である。平瓦凹面側に粘土をつけたして瓦当の厚みを出している。したがって、凹面は瓦当側から5~6cmのところまでに横ナデ整形痕、横ナデが終わったところから瓦当のつかない端面の方向に布目痕が見える。凸面は粘土をたしているか否かは不明であるが、やはり横ナデ整形がされている。無顎形式。胎土は緻密・焼成堅牢である。外面は灰青色、内部は灰褐色を呈している。N44E46区Ⅲ層中出土。

##### No.4 (挿図13-4, 図版10-4)

三重弧文の一部。No.3とほぼ同様の作りであり、ていねいに仕上げられ整っている。凹面は、瓦当側から5~6cmのところまでに横ナデ整形痕、横ナデが終わったところから瓦当のつかない端面の方向に布目痕がみえる。凸面は、横ナデ整形がなされている。凹面の瓦当付近には粘土を加えて厚味を増していることがわかるが、凸面側に粘土をたしているか否かは不明である。無顎形式。胎土緻密、焼成堅牢、灰白色。調査区域内表面採取。

##### No.5 (挿図13-5, 図版10-5)

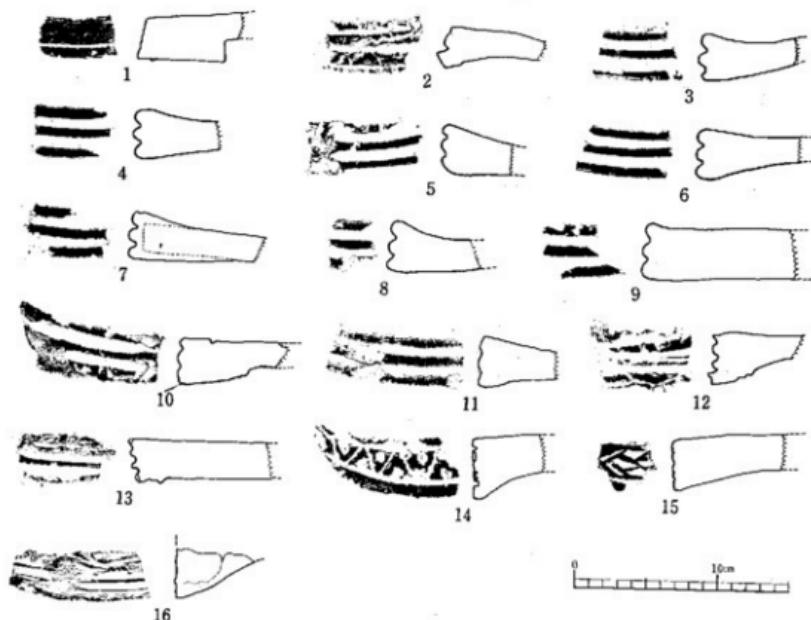
三重弧文の一部。弧の断面は凹面方向にやゝゆがんでいる。凹面・凸面とともに横ナデ整形。平瓦の凹凸両面に多少の粘土をたして瓦当の厚味を作っている。無顎形式。胎土はやゝ粗いが、焼成堅牢である。N40E46区ピット-7の埋土中出土。

##### No.6 (挿図13-6, 図版10-6)

三重弧文の一部。3本の弧がほぼ均等な割合で作られ、弧の断面は半円形を呈し、瓦当はきわめて整ったすきのない仕上げをしている。凹面は横ナデ整形されているが、一部剥がれているところがあり、そこに布目痕がみえる。したがって、平瓦の凹面に粘土がたされていることがわかる。凸面も、平瓦凹面にたされた粘土とともに横ナデされている。側面もていねいに仕上げられている。無顎形式。胎土は緻密で、焼成堅牢、灰青色を呈している。N44E46区ピット-8の埋土中出土。

##### No.7 (挿図13-7, 図版10-7)

三重弧文の一部。これも整った仕上げがなされており、弧の断面は半円形に近い。凹面は瓦当側から5~6cmのところまでに横ナデ整形痕、横ナデが終わったところから瓦当のつかない側面の方向に布目痕がみえる。凸面は横ナデ整形がなされている。平瓦凹凸両面に粘土をたして瓦当の厚みを出していることがわかる。無顎形式。胎土緻密、焼成堅牢である。外面は茶褐色、内部は灰褐色を呈している。N48E30区溝状遺構I中出土。



挿図13 新平面拓本及び断面実測図

No 8 (挿図13-8, 図版10-8)

三重弧文の一部。やはり、整った仕上げで弧の断面はほぼ半円形をなす。凹面は瓦当側から5~6cmのところまでに横ナデ整形痕、横ナデが終わったところから瓦当のつかない他端の方向に布目痕がみえる。凸面は横ナデ整形がされている。平丸凹面の瓦当付近に粘土をたして厚味を増していることがわかるが、凸面に粘土をたしているか否かは不明である。無頸形式。胎土緻密、焼成堅牢で外面は灰青色、内部は灰褐色を呈している。N36E46区Ⅲ層中出土。

No 9 (挿図13-9, 図版10-9)

三重弧文瓦の一部。瓦当は、やはり、半円形に近く整ったものである。No 8などと類似の作りであるが、本例はNo 8などより平瓦部が厚い。無頸形式。胎土緻密、焼成堅牢、灰褐色を呈している。N48E26区Ⅲ層中出土。

No 10 (図版10-10)

三重弧文の一部。弧の断面が半円形をなす整ったものである。凹面寄りの1本が欠失している。無頸形式。胎土緻密、焼成堅牢、灰白色。N48E26区表土中出土。

No 11 (挿図13-10, 図版10-11)

三重弧文の一部。弧の断面は整った半円形ではなく、乱れている。凹面は、瓦当近くまで布目痕がくっきりと残り、凹面側に粘土をたしている様子はみえない。段頸形式。凸面は、段頚をなし、頚は瓦当の約1.6倍であり、やゝ深い。頚部には横に走る開目痕がみえ、平瓦部には頚部とは異なる繩目痕が横方向に走っている。胎土緻密、焼成堅牢、灰青色である。N48E30区表土中出土。

No 12 (挿図13-11, 図版10-12)

三重弧文の一部。弧の高まりがありなく弧間の溝の部分もはっきりせず、弧の凹凸がきわめて

不鮮明である。凹面の瓦当近くは横ナデ整形されている。凸面もていねいに横ナデ整形されている。無頸形式。胎土中にはかなりの小石粒を含むが焼成堅牢、灰黒色である。発掘地内表面採取。

No.13 (挿図13-12, 図版10-13)

三重弧文の一型。ひょうに粗雑な作りであり、弧の状態も不均一である。凹面は瓦当のすぐきわまで布目がみられる。凸面は瓦当側から3cmのところまでに横方向の繩目痕があり、それが終わったところから縱方向の繩目痕がある。いずれもひょうに目の粗い繩目であって、太目の繩を使用していることが知られる。無頸形式であるが瓦当のところで厚味を増している。胎土緻密、焼成堅牢、灰黒色。N40E34区II層中出土。

No.14 (挿図13-13, 図版10-14)

四重弧文の一型。瓦当は彫りが深いが、弧の幅がひょうに細い。弧の断面をみると、弧の弧間の溝の部分がちょうど波形のようになっている。弧の部分はだいぶ消失しているが四重弧文と判断できる。凹面は瓦当の近くまで布目痕がみえる。凸面は瓦当側から1.5cmのところに、横に走る断面三角形状の突帯がある。全体に同じくらいの厚さで、瓦当部が特に厚くなっているということはない。無頸形式。胎土緻密、焼成堅牢。かなり高温で焼かれたらしく表面が溶出しているところもある。また、自然釉がかかり、表面全体につやがある。灰色で、黒い小さな斑点が全体に見える。N40E42区II層中出土。

#### ◎ 鰐齒状文

No.15 (挿図13-14, 図版10-15)

瓦当は、平らに整形された面上に、凹面寄りと凸面寄りに2本の深い沈線をひき、周縁と内区に分けている。2本の沈線で挟まれた内区には、さらに鰐齒状の沈線を入れ三角形状の区画を連続的に作り出している。そして、各々の三角形の区画の中心には竹管によるとみられる円形の刺突文がつけられている。また、三角形の区画の中心以外のところにもいくつかの刺突文がある。凹面は瓦当のすぐ近くまで細かい布目がみえる。凸面は瓦当付近に粘土を補強して瓦当の原味を増している。また、凸面には縱方向の整形痕がみられる。側面はヘラで切られたようになっている。瓦当の厚味は中央部が厚く、側面付近が薄くなっている。無頸形式。胎土は緻密で焼成堅牢、灰白色。

N48E30区溝中出土。

#### ◎ 被杉状文

No.16 (挿図13-15, 図版10-16)

残片であるが瓦当に被杉状文が認められる。凹面は瓦当から4~5cm離れたところから瓦当のつかない端面方向に布目痕がみえるが、瓦当近く4~5cmのところは粘土を削り取っている。凸面は縱方向の整形痕が認められる。無頸形式。胎土緻密、焼成堅牢、灰褐色。N48E26区瓦堆積中出土

#### ◎ 唐草文

No.17 (挿図13-16, 図版10-17)

唐草文の残片。凸面側の一部のみで全貌は不明。扁行か均正かもわからない。凸面にはヘラ整形痕が認められる。胎土緻密、焼成堅牢、灰青色。N44E46区III層中出土。

#### ③ 平瓦・丸瓦・その他の瓦 (挿図14, 図版10-18~21)

①で軒丸瓦、②で軒平瓦について述べてきたが、出土瓦の大半を占めるのは平瓦・丸瓦等である。したがってこの項において、これらの分類・整理の結果を示し、広汎にみられるものを取りあげる

べきであるが、頭書の通り整理途中のため2~3の特長的なものについてのみふれる。

No 1 (挿図14, 図版10-18)

平瓦の残片と思われるが、凸面に唐草文がみられる。小破片のため凸面全体にどのように文様が施されていたかは不明である。また、唐草文も扁行か均正か判断がつかない。軒平瓦の瓦当文様を施すための范を平瓦凸面の駁きとして使用したとみられる。凹面には布目痕がみえる。胎土緻密、焼成堅牢、灰青色を呈している。N48E30区溝状遺構Ⅰ出土。

No 2 (図版10-19)

樊斗瓦の一部とみられる。凹面には布目痕がみえ、端面ぎりぎりまでついている。凸面には細目があり、端面近くでは横方向、中央部では縱方向に走っている。両側面が残っているが、一方は、凹面の布目痕が引き続いて側面の半分までみられ、残り半分はヘラ削りされている。もう一方は、ヘラで2度にわたり縱方向に削られている。このことから、この瓦は、平瓦の粘土が半乾きの状態で縫合剤に半截された模様である。胎土は緻密で焼成堅牢であるが、かなりの高溫で焼かれたらしく表面に胎土中の鉱物質が溶け出している。灰白色であるが溶け出した物質が黒い斑点をなしている。N40E43区Ⅱ層中出土。

No 3 (図版10-20)

玉縁付丸瓦。側面1面と両端面の一部がみられる。玉縁の部分は欠失しているが、割れ口から玉縁と判定できる。凹面には布目痕がみえるが、玉縁へ続くところへも布目が切れることなくいっきに継続している。したがって、丸瓦製作時に玉縁もつけて製作していることがわかる。凸面は横ナデ整形である。側縁はヘラ削りされ、凹面の側縁付近もヘラ削りされている。両端面間の距離は(玉縁部を除く)29cmである。胎土は緻密で焼成堅牢、灰青色を呈している。N40E22区出土。

No 4 (図版10-21)

丸瓦の一部。狭端面と両側縁の中途まで残存。凹面には布目痕、凸面には横ナデ整形痕がみえる。狭端面における両側面間の距離は凸面側で10cm、凹面側で8cm、厚1cmである。比較的薄手のものであり、粘土円筒の2分の1である。胎土は緻密で焼成堅牢、灰白色を呈している。N44E26区Ⅱ層中出土。

④ 文字瓦 (挿図15-1~6, 図版11-1~8)

一口に文字瓦といっても、丸瓦・平瓦等に文字を記したものであって、屋根瓦の機能上の分類で文字瓦というものがあるわけではないが、文字のみられるものは重要な意味をもつと思われるので一項を設けてとりあげた。

「手」(挿図15-1, 図版11-1) 「真」(挿図15-7, 図版11-7) は文字がはっきりと読めるが、他は文字の部分まで割れており判読不能である。図版11-6・8のはかはヘラ書きであり、図版11-6は指畫、図版11-8は繩を巻いた棒状のもので押しつけた上にヘラ書きしたものようである。また、図版11-6・7は凹面布目上に書かれており、他は凸面に書かれている。なお、「真」の文字がみられるものは、すでに2例が知られている。

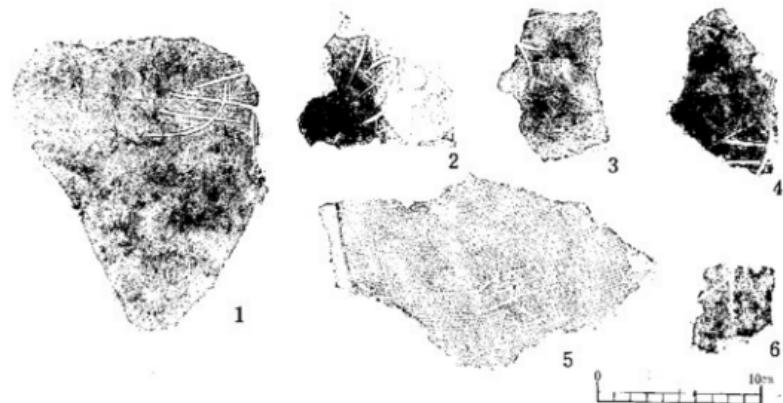
(注2)

<瓦についての2・3の管見>

— (その1) 軒丸瓦の接続法について —



図版14 平瓦凸面の唐草文  
5cm



挿図15 文字瓦拓本

④軒丸瓦の項で述べた瓦について、瓦当の剥離痕や割れ口等を観察すると、瓦当と丸瓦の接続法について何通りか看取できる。瓦当の接続法の解明は、それのみにとどまらず、軒丸瓦の製作技法そのものと深くかかわりをもつものであり、重要である。そこで、これらの瓦の接続法について、今回の調査以前に出土したものも何点か加えて述べてみたい。

軒丸瓦No.1（挿図16-1、図版9-1）  
（注3）

この瓦は裏面に明瞭な剥離痕が認められる。剥離個所は灰褐色であり、他は灰白色である。丸瓦の端面の圧痕がはっきりとした円弧があらわれている。このことから、瓦当裏面の平らな面に丸瓦の端面をあて、凹面側に多少の粘土を補強しただけの単純な接着法であることがわかる。丸瓦の凸面と周縁の外側との高さはほぼ一致し、凸面側にはあまり粘土の補強はなされていないようである。したがって、非常に剥落しやすい結果となった。

<参考1>（挿図16-1）

細い隆起線が2本と周縁の一部、裏面には丸瓦の一部が接続して残っている。瓦当の中房部から下は欠失している。この瓦はNo.1と同種のものであり、瓦当の構成も類似している。この瓦では、丸瓦が多少残っており、接続状態がよくわかる。これもやはり単なる接着法であり、跳ぎ目に粘土を若干補強しているのみである。瓦当裏面はナデ整形、丸瓦凸面は横ナデ整形、凹面の接続部は縱ナデ整形であり、丸瓦凹面は布目痕がそのまま残っている。丸瓦の厚さは1.4cmである。No.1とやや異なるのは丸瓦の高さであり、No.1に比してやや低い。凸面側にも多少粘土を補強している。阿久津重司氏所蔵。

軒丸瓦No.2及び<参考2>（挿図16-2、図版9-2及び挿図16-2）

No.2では割れ口から判然とした接続法が看取し得ないのでひとつの参考として、<参考2>を取りあげる。<参考2>は第1次調査時出土の素弁八葉蘿革文瓦であるが、花弁の作りなど細かい点の技法が異なる。No.2の方が粗雑な作りであって、同じ接続法かどうかわからないが、同種の瓦であるので接続法のある程度わかる<参考2>について述べ、No.2について、類推することにしたい。

この瓦では、周縁が2重に巡り、内区に近い方が一段下がっており、一段下がる線を境として、外周の一部が5cmにわたって欠失している。これは、製作時の粘土接着個所にそって剥れた形跡をみせている。この剥げ口から瓦当文様面と周縁外周と裏面の補強粘土との3ブロックに粘土が分れてみえる。そして、周縁外周はそのまま丸瓦に続く傾向をみせている。こうしたことによって考え

るならば、丸瓦の端面がそのまま周縁外周をなして瓦当を構成する要素として機能するよう製作されているようにみえる。はたして、そう言い切れるかどうか断定はしえないが、周縁が2段になっていることも上記と関連して考え合わせるならば符合してくるのであり、興味深い。そこで、丸瓦の一部が周縁をなし瓦当文様面をなしているとした場合の丸瓦の瓦当との接続法はどのようなものであったろうか。周縁の外周は文様面の周囲を一周しているのであり、丸瓦は裏面半周のはずであることをふまえると、次の2方法が想定される。その1は、まず瓦当文様面を芯によって製作後、外側半周に丸瓦が周縁外周をなすように接続し、補強粘土を凹面と瓦当裏面との隙間につけ、整形しながら瓦当下半の周縁外周も作製する。その2は、丸瓦作製用の粘土円筒に瓦当文様をはめ込み、円筒を縱割に半載し不要半分を除き裏面を補強整形して仕上げる。いずれであるか判断は、しかねる。このように考えてきたのは、周縁外周を形成する粘土と丸瓦部の粘土が連続しているという所見に基いているが、たまたまこの瓦の剥げ口がそう見えるだけであって、外周部と丸瓦が別に作られて接続され継ぎ目がわからないほどにしっかりつけられているという可能性もないわけではない。かりにそうだとすれば、文様面、周縁外周、丸瓦の3者の接合ということになり、上述の文様面と周縁外周をなす丸瓦との2者の接合より複雑な製法をとつづることになり、強度も不足すると考えられ、疑問の点が残る。

この瓦は、瓦当裏面、周縁外部、補強粘土等入念な仕上げがなされており、外面からはその接続法が容易には看

取できない状態

であるが、粘土の剥げ口や割れ口から探るその接続法は、No.1の単なる接着法とは異なる様相を呈している。

今後、この種の瓦の出土例の増加を待つとともに既発見のものをこうした観点からもう一度検討してみる必要があろう。

軒丸瓦No.3  
(挿図12-3、  
図版9-3)

これは、裏面に剥離痕が認められる。それによると接着法である。周縁の裏面上部と丸瓦凸



1



2



3



挿図12 軒丸瓦の接続法についての参考例

面の高さがほぼ一致する所で接続されている。

〈参考3〉(挿図16-3)

No.3と同種の複弁七葉蓮華文瓦。ほぼ完全な瓦当であるが丸瓦部は剥落している。これも明瞭な剥離痕がみえ、No.3同様な接着法であることがわかる。接続位置は、やはり、高い。阿久津重司氏所蔵。

軒丸瓦No.4(挿図12-4)

No.3や〈参考3〉と同種の複弁七葉蓮華文瓦。この瓦の接続位置は前2者同様に高い。しかし、瓦当裏面に丸瓦を若干食い込ませる形で接続させている点が異なる。

軒丸瓦No.10, No.11, No.12, (挿図12-8・9・10, 図版9-11・12・13)

これらの瓦は、瓦当裏面に布目圧痕があり、周縁の真裏にあたる部分には周縁にそってめぐる突帯がある。しかも、その突帯の裏面にも瓦当裏面からひとつづきの布目圧痕が認められる共通点を有する。瓦当文様のちがいこそあれ、同様な製法によるとみられよう。残念なことに、No.10, No.11は下半部のみであり、No.12は上半部の残欠であり、丸瓦部との接続状態は判然としない。まず、下半部裏面の突帯の状態をみると次の点に着目される。瓦当裏面から突帯裏面にかけて連続する布目痕は突帯の端で切られている。割れ目からみる粘土の方向も瓦当面から突帯へひと続きであって、突帯の端で切られている。布目も粘土もこの突帯の端で終わるようになしたものではなく、この端で切断したものである。このことは、突帯が現状よりもさらに長く伸びていたことを示すものであって、粘土に布目がつけられた後に粘土を切り落として塊状の長さの突帯にしたことを見ている。つぎに、こうした下半部の状態をふまえて上半部の丸瓦の接続法をどう考えたらよいだろうか。丸瓦部の遺存しているものがないのでこれから先は現段階では推測にすぎないが一応2方法が考えられる。瓦当と丸瓦を別々に作製し何らかの方法で接続するか、あるいは、丸瓦製作時の円筒の一端に瓦当も同時に作り、かかる後に円筒の不要の半分を取り去るかのいずれかであろう。ところで、前者とすれば、下半部裏面の突帯と上半部の丸瓦とがどのようにかかわって瓦当と接合したのであろうか、その点に問題がある。

これらの瓦と比較的よく似た文様や瓦当裏面を有する瓦が、上野国分寺・尼寺等群馬県内各地の寺院跡等で出土している。上野国分寺の出土瓦については、その製作法について論究がなされている。<sup>(注4)</sup>それによると、瓦当製作後丸瓦を接続したものという見解がとられており、瓦当裏面の布目は“布包み状円筒工具”というもののが使用のための圧痕としている。しかし、本遺跡出土のものについては、今後の出土例を待つて、瓦当と丸瓦と別々に作って接続させ仕上げたものか、丸瓦製作時に瓦当もいっぺんに作り出してしまったのかという点から究明していかねばならない。

以上、今回出土の軒丸瓦に若干の参考例を加えてその接続法についてふれてみたが、これらの軒丸瓦は、表面の文様のちがいとともに裏面についても、各種の瓦において製法上のちがいや特色を指摘できるのである。また、各種の瓦で扱った接続法・接着法等がその種の瓦にみられる普遍的なものであるかどうかを今後とも検討していかねばならない。

一(その2) 軒平瓦について 一

本遺跡出土の軒平瓦を概観すると、3次にわたる発掘で量的に一番多いのは、三重弧文である。一口に三重弧文といってもきわめて整ったものから粗雑なものまで各種あり、多様である。

整ったものは、弧の断面が半円形を成し、3つの弧及び弧間の溝ともバランスよく作られ凹面側面の仕上げも入念である。また、二重弧文や四重弧文のものもみられる。こうした重弧文系のもののほかに点数は少ないが、素文、唐草文のものも存在している。さらに今回出土した軒平瓦No.14の锯歯文やNo.15の稜形文を配したものは、上野国分尼寺で類似品の出土例がある。これら軒平瓦  
<sup>(注5)</sup>

が、どの種の軒丸瓦とセットになってくるかということも今後注意していく必要がある。

### 一（その3） 瓦の年代判定についての資料 一

瓦の製作年代については、近畿地方の瓦を中心として、軒丸瓦の瓦当文様や製作技法を主に他の資料も合わせ、かなり細かな編年がなされている。そして、標式的な瓦を出土する遺跡名を冠して何系統かに分類され、大陸や朝鮮半島の影響による様式にも区分けされてきている。<sup>(注6)</sup>

本遺跡の出土瓦について、その年代を云々するのはまだ時機尚早である。なぜならば、発掘面積も従々たるものであるし、塔跡等主要伽藍にもほとんど手をつけておらず、把握している瓦の量・種類も少ないからである。また、瓦は、建築物に付属するものであるから、瓦のみを遺構と切り離して考えるわけにもいかない。瓦の量・質が出そろった段階で遺構やその他の遺物等との総合的な検討のもとに瓦や遺構の年代を考えていくべきであろう。

このような観点からすれば、現時点は瓦の年代を考えいくうえでの緒についたにすぎない。しかしながら現段階においても何種類かのグループに分類でき、その間の年代差もあるようである。そこで、現在までに判明した範囲において、およその傾向を示し、今後、本遺跡の年代考察や瓦相互間の編年を行なっていくうえでの敲き台として、資料を提供しておきたい。本稿を進めるにあたってはとりあえず軒丸瓦を主とし、軒平瓦と若干加味していくことにする。平瓦・丸瓦については整理不十分のためふれることができない。また、遺構との関連についてもふれられない。

山王庵寺跡出土の軒丸瓦は今までのところ少なくとも4種のものが認められる。

その1は、隆起線で花弁を形作る素弁蓮華文であり、軒丸瓦No.1や<参考1>等がそれにあたる。その2は、素弁八葉蓮華文であり、軒丸瓦No.2や<参考2>等が属する。その3は、複弁七葉蓮華文であり、No.3や<参考3>等が属する。その4は、隆起線でもって花弁の輪部をとり、裏面に布目痕を有するもので、No.10、No.11、No.12等が属する。それぞれのグループに属するものについて詳細に観察すると、文様の細部・測定値・技法の優劣等にかなりの差がみられる。たとえば、その2に属するものも花弁の作りは実見した3点においてもかなり異なる。ちなみに、軒丸瓦No.2と<参考2>とを比較してみると、後者は、文様面の彫りがかなり深く花弁の輪郭や弁央の稜線が比較的はっきりとしている。ところが軒丸瓦No.2は、弁央の稜線ではなく、花弁の輪郭のふちどりもはっきりせず平坦な面で処理され、全体に粗雑な印象を与える。また、その3の複弁7葉に属するものも、軒丸瓦No.3と<参考3>は近似しているが、軒丸瓦No.4は24頁の指摘のとおり前2者とはだいぶちがう。同種の瓦とはいえ、その2やその3のグループの数少ない事例からもこのようない法上の差異がみられるのは何に起因するのであろうか。ひとつには、同時期に作られたとしても、窯のちがいや工人の技術水準の優劣の差ともみられようし、ひとつには、時代差ともみられよう。あるいは両方の要素が重なり合っているのかもしれない。したがって、同種の瓦当文様であるといって画一的に年代決定してよいか問題があろう。

そうした点も考慮して考えた場合、その1～その4をおよそどのくらいの時期のものとして位置づけていったらよいだろうか。試みに、『飛鳥白鳳の古瓦』で行なわれている軒丸瓦の文様を主体とした編年を参考にしてみると次のようになる。<sup>(注8)</sup>

軒丸瓦No.1、<参考1>等その1のグループは、瓦当が窯内で接続法は単純な接着法であり、飛鳥時代の百済様式の瓦にみられる特色をもっている。しかし、花弁の作りは細い隆起線のみで区画するだけの形式化の進んだものであり、飛鳥期にみられる初現的な写実性は失なわれている。どのあたりまで下るものかが問題となろうが、白鳳期までくらいには入れて考えるべきであろうか。

軒丸瓦No.2、<参考2>等、素弁8葉のその2のグループのものは、百済様式の流れを汲み白鳳期のものとされている。かりに技法上の優劣を年代差としてみるならば、軒丸瓦No.2はさらに年代  
(注9)

を下げて考える必要があるかもしれない。

軒丸瓦No.3、<参考3>等その3のグループは川原寺式の系統をひくものであろう。しかし、瓦当の構成は、川原寺でみられる初期的なものとはかなり異なる様相がある。川原寺の祖型のものは、花弁8葉で中房が大きく花弁が肉厚にもり上がり、周縁に鋸歯文を配しているのに比して、本遺跡出土のものは、花弁7葉であり中房は小さく花弁の肉が薄く素文綴である。これは、川原寺式の瓦が盛行してからの地方的な発展の形態としてとらえられるであろう。本県太田市天良の寺井廃寺出土の瓦に、川原寺の祖型に近いものがみられるに比して対照的である。川原寺式の瓦が大智朝に始まり、天武朝によって盛行したといわれることからすれば、少なくともそれ以降のものということであろうか。また軒丸瓦No.4等、測定値や技法上の多少異なるものの存在を年代差とみると、この瓦についても年代の幅を考えていかねばなるまい。

軒丸瓦No.10、No.11、No.12等その4のグループは、施文方法・周縁の形態・裏面の状態等に顕著な特色がある。そして、No.10は上野国分寺・尼寺の中間地域の調査で出土している瓦と酷似している。<sup>(注10)</sup> 上野国分寺及び尼寺出土の瓦は、相当数の瓦当が知られ、60種以上あるといわれている。そのうちの1種との類似性をもって国分寺との関連をただちに結びつけるわけにはいかないが、軒平瓦にも尼寺出土のものと酷似しているものが2点あることは、瓦において、山干廃寺と国分寺との間に何らかの関連があることを示唆している。<sup>(注11)</sup> また、軒丸瓦の瓦当裏面の布目庄痕も国分寺瓦の多くにみられる特色であり興味深い。これらのことから、この種の瓦は国分寺の造営に関連した時期のものとみられよう。

そうしてみると、その1～その3は、その4とは文様や製作技法上から著しく異なるものであり、前者は、おむね、国分寺造営以前の白鳳から奈良前半期のものとして考えられ、その4は、国分寺造営の始まる奈良中～後半期のものと考えられてくる。これは、近畿地方で行なわれている軒丸瓦の文様を主体とした編年順に順次しつづけてきたものであって、これが、本遺跡において妥当かどうか、頭書に記した如く発掘調査をもとにした総合的な検討のもとにつめてゆかねばならない。また、図版9～8等、これら4分類の範囲に入るやうに入らないものも現存しているのであり、これらについても出土例の増加を待って考えていかねばならない。<sup>(注12)</sup>

## (2) 金銅製品・その他 (挿図17、図版11～9～10、12～1～9)

### ① 金銅製品 (図版11～9)

縦2cm×横3cmのごく小さな残片である。厚さも1mmに満たないほどの薄いものであるが、3枚の金属のはり合わせの様子が割れ口から看取される。外面は金箔であり、中は鉄である。一番内側は何の金属であるか肉眼では判断し得ない。現状では3枚になっているが、元はさらに何らかの物質が内側へ続くのかもしれない。外面の金箔面は、泥が十分に落とせないため明瞭ではないが、明らかに細工を施してあり文様を形作っている。文様は宝相華文であり、精巧な作りである。唐の影響を受けたものであって、奈良朝頃の作とみられる。小破片であるため、全貌を知り得ないが、仏具の一部かあるいは鑑度品の一部であるとみられる。N44E30区IV層上面出土。<sup>(注13)</sup>

### ② 鉄 淬 (図版11～10)

鉄滓が数片出土している。大きいものは11cm×11cm×3cmであり、小さいものは3cm×5cm×2cmである。出土位置は、N48E30区溝中で2片、N44E34区Ⅲ層中で2片、N44E30区で1片、N44E46区で1片、N40E46区ピット7埋土中で1片である。

### ③ 鉄 釘 (図版12～1④～⑦)

鉄釘とみられるものが6点ある。いずれも残片であり、錆化のすんだものである。いずれも角釘であるが細い小さなものばかりである。ちなみに比較的しっかり残っている⑦の現存長7.6cmで

あり、太さも太いところで $5\text{mm} \times 5\text{mm}$ くらいである。出土地は、①N40E26区②N44E34区Ⅱ層中  
③④N40E42区⑤N40E26区渠石群下⑥N40E42区Ⅱ層中である。

④ 鉄製刃物（図版12-2）

先端が細くしだいに幅を増していく。厚味は約 $2\text{mm}$ ほどであるが、片側面が薄く刃になっているようである。したがって何らかの刀物と思われるが残片であって何であるか不明。N40E42区Ⅱ層中出土。

⑤ 繩の羽口（図版12-3）

繩の羽口の先端部残片である。現存部の径 $7\text{cm}$ 、送風口の径約 $2\text{cm}$ である。先端部には溶けた鉄や自然釉が付着し黒っぽくなっている。胎土中には、所謂、スサが混じっているのが認められる。N36E26区表土中出土。これのほかにも、N44E46区ピット9の埋土中から羽口の残片が出土している。

⑥ 土 鍋（図版12-4）

紡錘形であり、長軸にそって貫通した孔がある。N40E46区Ⅲ層中上面出土。

⑦ 垂 石（図版12-5～6）

砥石が2点出土している。図版12-5はN44E30区表土中出土。図版12-6はN44E42区Ⅲ層出土。

⑧ 須恵器片（図版12-7）

須恵器底部片。底部に高台がついている。高台の高さは $8\text{mm}$ で接地面は $8\text{mm}$ の幅をもち平らになっている。高台径を復原すると推定約 $13\text{cm}$ であり、かなりの大きさのものとなる。器表には自然釉がかなり黒っぽくなっている。底に×字状の窓印が認められる。N36E42区Ⅲ層中出土。

⑨ 灰釉陶器片（図版12-8・9）

№1（図版12-8）

口辺部残片。内面は口縁から $1.9\text{cm}$ のところで一段下がっている。段皿の一部とみられる。内部には淡模の釉が認められる。N44E38区Ⅲ層中出土。

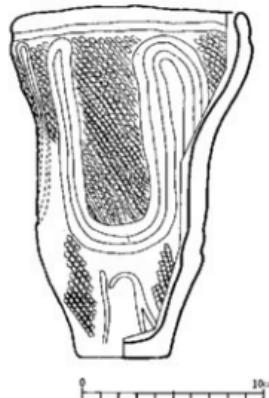
№2（図版12-9）

底部残片。高台がめぐっている。割れ口から付け高台と判別される。高台の高さは $1\text{cm}$ 、推定径は $7.7\text{cm}$ である。N44E34区Ⅲ層中出土。

⑩ 繩文土器（挿図17）

繩文土器が1個体発見されている。他に小破片が多数あるわけではなく、これのみであって繩文の住居跡が発見されているわけでもない。復元の結果、ほぼ完形となつたので、取り上げたが、寺院跡と直接関連するものではない。今後、さらに繩文土器や住居跡が発見されることがあれば、この地の変遷を知る上での一資料となろう。

小型の壺である。底部がすさまじく、胴部はほぼ直角に立ち上がり口辺部に向かうにしたがって外反し口縁のところでやや内寄している。器表には沈線と繩文を巧みに配して施している。口縁部径 $13\text{cm}$ 、器高約 $19.5\text{cm}$ である。南関東の編年でいう加曾利式のもののうち比較的新しいものである。胎土、焼成普通・茶褐色。N44E30区Ⅲ層中出土。



挿図17 繩文土器実測図

(3) 壁穴住居跡内出土遺物（挿図18、図版12-10～15）

① 4号住居跡出土遺物

住居床面上から土師器の長甕形土器・小型甕形土器が、また竈内から若干の須恵器片が、埋土中から土師器の环形土器・長甕形土器の破片が数片出土している。

No.1（挿図18-1、図版12-10）

完形の長甕形土器。全体的に赤褐色を呈するが、副部中位から底部にかけて部分的に黒くなっている。整形は雄で副部器面は縦方向に粗くヘラ削りされ凹凸がめだつ。口縁部内外面は横ナデされている。胴部内面には板状の整形具で横ナデした痕が残っている。胎土は砂粒を含むが焼きは良く墨く純っている。器高32cm、口縁径14.8cm、胸部最大幅24cm。

No.2（挿図18-2、図版12-11）

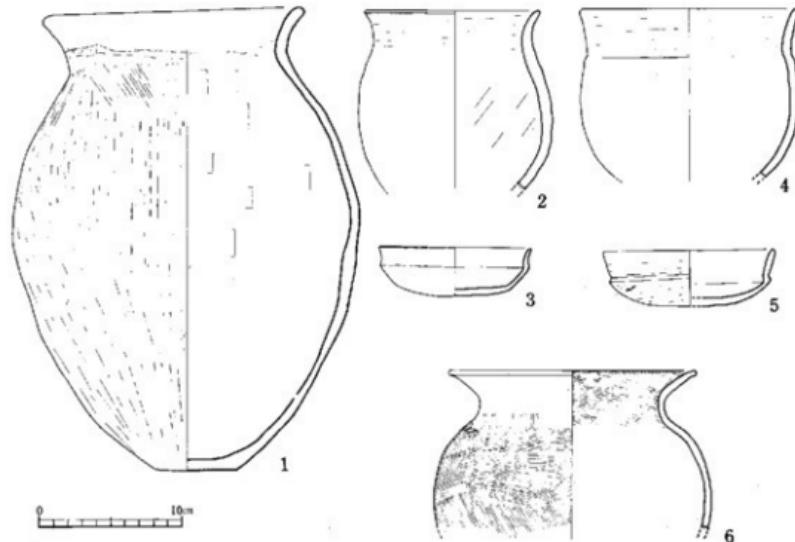
小型甕形土器。胴部下半が欠損している。球形の胴部に小さく外反する口縁を有する。胴部器面には不定方向の細かなヘラ削り整形痕が残り、やゝ凹凸が見える。黒褐色を呈し胎土中には多くの砂粒が含まれておりザラザラしている。焼きはあまり良くない。口縁径12.3cm、胴部最大幅13.8cm。

No.3（挿図18-3、図版12-12）

不形土器。覆土中より出土している。体部と口縁部との境には不明瞭な稜線が残る。底体部器面は不定方向にヘラ削り整形され、底面にはその際の凹凸が残っている。口縁部は横ナデされている。口縁部および底体部内面は褐色を呈し、底面は黒色を呈する。胎土は非常に細かく焼きは良い。口縁径10.6cm、器高3.5cm。

② 5号住居跡出土遺物

床面上より土師器の环形土器・小型甕形土器が出土している。



挿図18 住居跡内出土土器実測図

No.1 (挿図18-5, 図版12-13)

环形土器。浅い底体部との境には明瞭な稜線を表わし、直線的に外開きする口縁を有している。底体部器面は細かく回転するようにヘラ削り整形され、口縁部は横ナデされている。赤褐色の色調を呈するが内面には黒色の油質状付着物が部分的に見られる。胎土は非常に細かい。口縁径12cm, 器高 3.8cm。

No.2 (挿図18-4, 図版12-14)

小型菱形土器。くびれのない頸部から直線状に外開きする口縁を有している。頸部には明瞭な段差が見える。胴部内外面は不定方向にナデ整形され、口縁部は横ナデされている。胎土は非常に細かく焼きも良い。全体的に褐色を呈するが、胴部内面には黒色の付着物が全面に見られる。口縁径15cm, 脚部最大幅15cm。

⑧ 6号住居跡出土遺物

住居裏土中より土師器の菱形土器片・环形土器片および瓦片等が出土しているが、それらはいずれも小片のみであった。住居床面からは遺物は出土していない。

No.1 (挿図18-6, 図版12-15)

固く締った薄手の菱形土器で黒褐色を呈する。口縁部および脚部上半の一部が残存している。球形の胴部に曲線を描いて比較的強く外反する口縁を有している。胴部外面には不定方向の浅い刷毛目が残り、また口縁部内面にも横位の浅い刷毛目が存在する。胴部内面および口縁部外側は横ナデされている。胎土は細かい。口縁径17.6cm, 脚部最大幅19.3cm, 厚さ 0.4cm。

以下、上述の3基の堅穴住居跡出土の土器の時期について若干検討しておきたい。4号および5号住居跡出土の土器は、南関東の編年によれば鬼高期の後半に属するものと考えられる。一方、6号住居跡出土の土器について見れば、No.1はその形態・整形の技法に比較的古式の様相が見られ、南関東の編年では和泉期に入るものと考えられる。しかし、この土器と共に4号および5号住居跡出土の环形土器と同種の土器片数点も出土しており、同一住戸内で遺物に時間的な開きが認められることからすれば、No.1の土器のみをもって本住居跡の時期を決定するには問題がある。

(注1) 群馬県立博物館所蔵のものと、『飛鳥白鳳の古瓦』(昭和45年 奈良国立博物館) 図版45所収のものの2点はほぼ完全な瓦当をみせている。

(注2) 阿久津重司氏所蔵の平瓦2点にみられる。いずれも皿面にヘラ書きされている。

(注3) 軒丸瓦の接続法について、『飛鳥白鳳の古瓦』において4分類を示している。それによると接着法印籠つぎ法・はめ込み法・一本作り法である。同書300頁

(注4) 『上野国分寺跡発掘記』(1975年 群馬町教育委員会) 10頁

(注5) 『上野国分寺跡発掘調査報告』(昭和45年度調査概要 群馬県教育委員会) 15頁

(注6) 代表的なものに『飛鳥白鳳の古瓦』がある。

(注7) 群馬県立博物館所蔵のものも文様面の彫りが深く花弁の輪郭や中央の稜線がはっきりしている。

(注8) 『飛鳥白鳳の古瓦』において本遺跡出土のもの軒丸<sup>1</sup>や<参考2>と類似の瓦が編年体系の中に位置づけられているので一応これを参考とした。

(注9) 同書においては、山王庵寺跡出土の素井8葉蓮華文瓦を白鳳前間に位置づけている。同書で扱われているものは、実見していないが図版でみると本稿で取りあげた<参考2>と類似した作りであり計測値も近い。

(注10) 『上野国分寺跡地域発掘調査報告 — 佛寺尼寺中間地域の考古学的検討 — (昭和46年 群馬県教育委員会) 43頁

- (注11) (注4) と同じ 8頁
- (注12) (注5) と同じ
- (注13) 『考古学雑誌』(第61巻第4号 昭和51年 日本考古学会)「奈良時代における東国の大寺院造営」において森部夫氏が上野國分寺と山王庵寺との関連についてふれておられる。
- (注14) (注6) と同じ
- (注15) 図版9-8のほかに『前橋市史』(第1巻 昭和46年 前橋市)「在地豪族の構成を示す山王庵寺跡」でとりあげられている“変形複弁珠文帯付軒丸瓦”という例も知られている。
- (注16) 尾崎吉左雄博士御教示。この遺物の処理方法等について東京国立博物館 鵜井正道氏に御指導いただいた。

### III 推定寺域一帯の現形測量について

山王庵寺跡一帯の調査を年次計画で推進していくには、調査対象地域の厳密な測量図が必要である。現状を正確に把握して調査箇所を有効に選定していくとともに、調査の結果明らかになった遺構を図上におとして、年次毎の成果を総合的に判断していくかねばならない。そうした意図のもとに、本年度は現形測量ならびに、発掘用の基本杭の設定を行なった。測量の要項は以下のとおりである

- ①推定寺域は、心礎を中心にして2町四方といわれている。寺域が多少ずれていることも想定し、約3町四方を測量対象とした。1町 $\div$ 109mとすれば3町 $\div$ 327mであるが、およそ300m $\times$ 300mの範囲を想定し、90,000m $^2$ について測量を行ない現形図を作製した。
- ②測量にあたっては、第3次までの発掘調査に合わせ、心礎合利孔を基準に磁北をとり、東・西・南・北各々150mを袖線として測量範囲を設定した。なお、磁北は、真北から西へ6.5°傾いている。
- ③縮尺は500分の1。50cmセンター。レベルは心礎上面の合利孔近くの平らな面を0とした。
- ④心礎を通る東西及び南北の袖線について、縦断図を作製し、土地の高低について調べた。なお、その縮尺は、水平方向500分の1、垂直方向100分の1である。
- ⑤測量範囲については、すべて心礎を原点とする座標軸で表わせるようにしてあるが、今後の調査のため、発掘用の基準杭を各所に設定し、調査のたびに測量誤差が大きくてないようになした。基準杭は、追加工事分も含めて15点設定し、その杭の位置を現形測量図にも記入した。

#### — 現形測量図による所見 —

現形測量図は、今後さまざまな形で利用できるものであり、有効に活用していかなければならぬが、そればかりでなく、測量図そのものから読みとれるものが若干ある。

測量図(図版14)でみるとおり、300m四方の測量区域の大半は、宅地である。塔跡以東は他に比して、密集度が高い。畠地は、北部及び南西部に若干と、宅地内に多少みられるにすぎない。現状の地形が、はたして、どれだけ寺院が存在していた頃の地形をとどめているか見当もつかないが、平面図ならびに縦断面を検討してみた結果はつぎのとおりである。

本寺域一帯の地形は、北西から南東に向ってなだらかな傾斜をしている。北西隅の地表面は心礎上面より+250cmであり、南東隅のそれは-200cmである。即ち、北西隅と南東隅の両者の比高は約450cmである。北東隅と南西隅は-100cm前後ではほぼ同高であるが、北東隅の五千石塚以東は著しく下がっている。測量地域内の高低を総合的にみると、塔跡付近が、中間的なレベルにあることがわかる。そこで、等高線の様子に何か特徴的なものが見出されるか否か追ってみたが、はっきり

したこととは何ら指摘しえなかつた。つづいて、2本の縦断図によって、土地の高低の様子をみた。それによると、等高線では看取し得ない微妙な変化が読みとれる。縦断図は、心礎を通る東西・南北各2本である。まず南北縦断面でみると、塔跡が一段高くなり、平らな面をしている。また、塔跡の北約50m付近にやゝ高い所があり、塔跡の現地表とはば同高である。また、塔跡の南30~70mの間にもほぼ平らな一区画がある。つぎに、東西縦断面でみると、塔跡付近が一段高く平らであるが、塔跡の東約70m付近にも、やゝ小高く平らな面が認められる。また、心礎の西80m以西も、わずかに高まり平らになっている。

これら、東西・南北2木の縦断図にみえる地形の多少の起伏をもって地下に埋もれた遺構の有無を推測するのはきわめて危険である。なぜなら、時代の変遷とともにその時代の生活の必要性に応じて地形も大きく改变されていることが考えられ、現に、塔跡も、東と南は道路によって大きく切断されているからである。しかし、それでもなお、東西・南北両断面に塔跡がはっきりとその痕跡をとどめていることをふまえれば、上記指摘の断面図上の変化も、看過できないであろう。しかし、どれも発掘してみる以外は何もわからない。ただ、今後の発掘調査に際し、留意して進める必要はある。

なお、今後の発掘調査のため、基準杭を15点設定したがその箇所は以下のとおりである。

N50, N90, N140, N100 W21, N50W150, N128 W150, N25E121, N25E150,  
N100 E70, S30, S69, S150 W76, S150 W121, W38, W150.

## IV 結 語

### (1)

山王庵寺は、その存在を示す遺構および遺物から、全国的にも稀にみる豪華・華麗な古代寺院と推定され、そこには、全国的にも卓越した群馬の古墳文化の結実と、古代東国文化の原点がある。しかし、その現状をみると、伽藍配置をはじめ規模・形状そして性格など、あまりにも解明されていない面が多い。他方、こうした現状に対して、最近、宅地造成などの各種開発が盛んとなり、遺跡破壊の危険性がにわかに増大してきた。こうした状況の中にあって、昭和49年、山王地区の土地改良事業が開始されることになり、これに伴う事前の発掘調査が、山王上地改良区から山王庵寺発掘調査團に委託され、主として寺域確認の調査が実施された。以来、前橋市教育委員会では、田原ならびに県費補助による長期的な学術調査を計画し、50年度における第2次発掘調査を経て、ここに第3次発掘調査を実施した。

### (2)

昭和50年度における第2次発掘調査は、塔中心礎石の北方40m、東方40mの地点を中心に調査を実施した。この地点を対象として選んだのは、この他には古くから礎石の存續が知られ、建造物跡とみられていたことと、この部分の一角に家屋新築の計画があり、こうした一連の重要度に対して緊急性が認められたからである。その調査の結果については既に「山王庵寺跡第2次発掘調査概報」に記したとおりである。

昭和51年度における山王庵寺跡の第3次発掘調査は、かかる第2次発掘調査の結果を踏まえて、前にも記したように、次のことを中心にその計画を樹立した。

- ① 塔中心礎石の北方40m・東方30m地点付近(50年度調査の対象とした地域の西方に隣接する地域)の、既に所在の明確となっている礎石を伴う遺構を掘り出し、この遺構の性格を明らか

にする。

④ 第2次発掘調査の際、発見された柱穴状ピットの緊りと広がりを追い、この性格を明らかにすると共に、礎石を作う遺構との関連の有無について調査する。

⑤ 瓦等の出土遺物の整理・研究と、遺物面からの山王庵寺跡の究明にあたる。

以上の目的にそって、51年度第3次発掘調査は、7月26日から8月14日までの15日間、幾多の調査関係者の献身的な努力と協力によって実施された。その概要は既に記したとおりであるが、これを要約すると概ね次のとおりである。

① 各種遺構と地層との関係について

調査地域の地層は、地表よりローム層にいたる地層は、I・II・III・III'・IVの5層に分けることができる。このうち、III層は2次あるいは3次的な堆積とみられ、そこに含まれる軽石等の落下降代をもって、そのまま地層形式の年代とすることはできないが、地層と確認された主な遺構との関連は次のとおりである。

II層中の遺構 — 磂石群A（既に存在の確認されていた礎石群）

III層上面から確認されII層の土を埋上としている遺構 溝状遺構イ・ロ・ハ・ニ  
柱穴状ピット群1

III層中あるいはIII層上面の遺構 — 磂石群B 遺構1

IV層上面での確認された遺構 — 柱穴状ピット列1・2 壁穴住居跡4・5・6号

② 磂石群Aの遺構について

この遺構は既に存在の確認されていた礎石より成立つ建築遺構で、周囲の土地に比較して僅かに高いという地形的特色並びに瓦等の出土状況から、山王庵寺の主要伽藍の一つとも見えていたものです。これを掘り出し、この遺構の性格を明らかにすることは、本次発掘調査の主目的であった。発掘調査の結果、本次調査においても、住宅等の関係もあって調査不可能な部分があつて、その全貌は明らかにすることはできなかった。確認された部分は、建造物の東端部分とされ、棟間（南北）3間、各柱間300cm（10尺）であり、桁行（東西）については、その全体的な形状は明らかでないが、最も東端の柱間は390cm（13尺）であることが判明された。これが性格等については明らかになし得なかったが、この時期は、漫漫山B輕石（1108年あるいは1281年噴出）を含んだII層中にあることからして、中世以降のものとされた、山王庵寺等との直接的な関連はないことが明らかとなった。

③ 磂石群Bの建築遺構について

前記礎石群Aの建築遺構下において今回初めて発見された遺構で、礎石そのものは既に取り除かれ、僅かな握り形と栗石からなる礎石痕によって、その存在が確認された。確認された礎石痕は3ヶ所であり、勿論、これらの礎石痕からは建造物の全体的な規模、形状は明らかではないが、柱間の間隔は360cm（12尺）で、その方向は、南北の軸線が、磁北より5度5分東にふれ、礎石群Aの建築遺構と共に、史跡山王塔跡の中心礎石上面にみる舍利孔から東・西・南・北の各方向にのびる放射状孔の南北線と一致する。又、これが構築された時期は600年（±10年）に噴出したとされる棟名山二ツ岳輕石を含んだIII層上にあり、しかも、礎石群Aの建築遺構よりは古いとされる。このことから本遺構は、山王庵寺の伽藍の一つとみられ、今後これについての解明が期待される。

④ 溝状遺構および瓦の堆積について

礎石群A・B遺構の北辺・中間・南辺さらにその南側に、東西に並行してはしる4本の溝状遺構が確認された。この横断形状は浅いU字状を呈し、その計測値は部分によって異なり狭い所では75cm、広い所では150cmを数える。深さも21cm～60cmと一定したものがない。なお、この4本

のうち、2本は、50年度（第2次）調査の際、AおよびBトレチ内で確認されたものに継続するものとみられる。また、これら溝状造構は、占瓦片を多量に含んだII層で覆われ、水の流れたような痕跡はほとんど認められなかった。よって、多量の瓦片等によって、埋まつたこの溝状造構は、山王庵寺が廃墟と化した後、瓦等の処理のために掘られたものともみられ、その時期は、II層堆積のことと、礎石群Aの建築物構築の際の整地に係るものとも思われる。

#### ⑤ 柱穴状ビット群およびビット列について

礎石群A・B造構の東側に接して柱穴状ビットが多數確認された。これらビットには、一定の方向性と間隔があり、十木あるいは建築的な構造物に関連するものと推測される。特に、ビット6・7・8・9の4個からなる柱穴状ビット群は、それぞれのビット内に柱痕らしき部分も認められ、建築物の柱穴痕を想させるものがある。しかし、規模・形状の点に問題があり、にわかには断定できない。また、ビット列1並びに2についても、前記ビット群同様、現段階においてはその性格を決定づけるものではなく、今後の調査にまかされた。

なお、これらビット群およびビット列の構築された時期は、ビット群は、その内部に、II層あるいはそれに類似する土質があり、これらからしてII層等の堆積後（1108年あるいは1281年以後）とみられる。これに対して、ビット列1および2は、その内部にII層等の堆積がみられないことから、II層堆積以前のものとみられ、山王庵寺の建立の時期あるいは、その前後と推定される。

#### ⑥ 窓穴住居跡について

前年度の第2次発掘調査に引きいて、本次調査においても窓穴住居跡3戸が確認された。これら住居跡は、用地等の關係から何れも完掘されておらず、その規模の形状等は明らかでない。しかし、4号住居跡は、その北壁長が3m45cm、5号住居跡では南壁長が約3mと計測されており、比較的小規模のものとみられる。出土遺物は、土師器の長甕・小型變形上器および环形土器等である。これら住居の使用された年代は、出土品や遺構との重複関係等からして、山王庵寺の建立以前にあたる8世紀初頭前後のものと推定される。

#### ⑦ 瓦について

本次発掘調査の際に発見された瓦を中心に、第2発掘調査並びに既に発見されていたものを含めて、山王庵寺跡出土の古瓦についての調査と研究が進められた。この結果、特に軒丸瓦については、その瓦当面の文様並びに瓦当と丸瓦との接続法等の相違から、4種に分類することができた。そして、これら各種の相互の違いは、時間的な差とみられることから、編年的検討も試みてみた。この結果は、層位的な在り方や遺構との関連について、今後、なお検討を要するが、山王庵寺跡研究のうえで一つの指針となり得るものである。

#### (3)

以上、本次発掘調査の主な結果を概略記したが、これら結果の中で、特に注目されるものに重複する二つの礎石を伴なう建築遺構がある。これらは、今回の調査ではその範囲が限定されていたため、規模の形状など全貌は明らかにされていない。したがって、これら遺構についての考察は時機尚早の感がある。しかし、この遺構のうち、特に上部に位置する3個の礎石（礎石群Aの造構）は、調査開始以前から既にその存在が注目され、山王庵寺の伽藍配置の考究の際などにしばしば言及されているもので、この際調査の結果を踏まえて若干の考察を加えて置く。

塔中心礎石の北東約50mの地点、松社町總社2405番地、阿久津丑治氏宅裏庭に礎石が発見されたのは、竹籠の開墾の際であり、昭和20数年の頃を聞く。以来、この地が周囲の土地に比較して、僅かながら高いという地形的な特色と、石製廻尾の出土地に近いということ、更に瓦等の出土状況か

ら山王廟寺の主要伽藍の遺構とも目されてきた。

転じて、山王廟寺跡の所在する地は、総社町総社昌楽寺廻りと呼ばれ、この地に古く昌楽寺が存在したことが推測される。すなわち、現在、昌楽寺（天台宗）とよばれる寺院は、元総社町の総社神社に隣接して所在するが、この寺院は、江戸時代の初めに描かれたとされる元総社村の絵図には、その存在が記されていない。他方、元総社町にはほど近い、総社町の山王部落の南端、牛池川に接した地には、昌楽寺の名を冠した水車があり、古くこの付近に昌楽寺が在ったとも聞く。そして、更に北して、史跡山王廟寺塔跡の所在する日枝神社は、天台宗系の守護神を祀ったものとみられ、近くに天台宗寺院の存在が予測されるが、これが、昌楽寺廻りという地名と併せて、山王廟寺跡の所在する山王の地に、昌楽寺とよばれる寺院の存在したことと立証している。よって、現在元総社町に所在する昌楽寺は、総社町総社山王の地から牛池川線辺の地を経て移動したもので、その時期は江戸時代以前のことと思考される。このため、山王廟寺の所在する山王の他には昌楽寺に関する遺構の存在が予想され、前記、阿久津丑治氏宅裏面から発見された群石は、昌楽寺に伴う建造物の遺構とする観方があった。

以上、既に存在の知られていた礎石については、二つの觀方があり何れかに決定しがたいものがあった。しかし、今次の発掘調査において、はからずも、重複する二つの礎石を伴う建築遺構が確認され、これが解決に大きな前進をみた。すなわち、上部に位置する礎石群Aの建築遺構は、1108年あるいは1281年噴出の、浅間山B桜石を含んだⅡ層中に入り、中世期の遺構であることは確実であり、おそらく、昌楽寺に関する建築遺構であろう。これに対して、下部に位置する礎石群Bの建築遺構は、礎石群Aの建築遺構より古いことは明らかであり、その位置的関係や瓦等の出土遺物の状況からして、山王廟寺に関連する建築遺構とみられる。

#### (4)

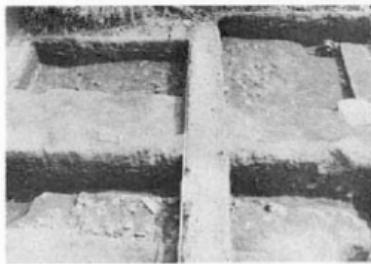
ここに第3次発掘調査は実施され、前記の成果を得て、所期の目的は一おう達成された。しかし、今次調査においても、なお、解決されないものがある。例えば、柱穴状ピット群並びに柱穴状ピット列についてである。今後、これらについて、山王廟寺との関連とも合せて、その性格の究明に当る必要がある。また、豊穴住居跡についても本格的な検討が重要である。このように、広大な山王廟寺跡の寺域内には、解決しなければならない問題が山積しているが、こうした中にあって、今次の発掘調査が、そうした問題解決の一里塚であると共に、その調査結果は、問題解決の指針となり得るものとかたく信ずる者である。



(1) 発掘前の状態（人の立っている所が礎石推定位置）



(2) 発掘後の礎石群の状態



礎石群Aの礎石各部

(上) 磊石1及びその根固めの様子

(中左) 磊石2及びその根固めの様子

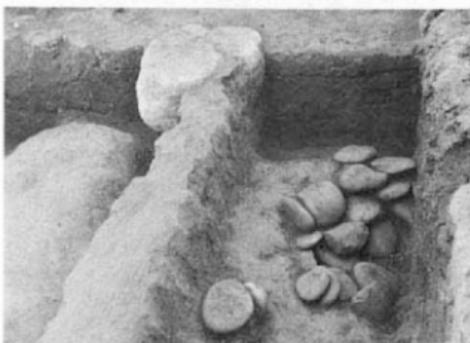
(中右) 磊石3の根固めの様子

礎石群東の瓦の堆積（下）

礎石下根固めイ（右）  
礎石 1（左）



礎石下根固めロ（右）  
礎石 4（左）



礎石下根固めハ（右）  
礎石 5根固め（左）

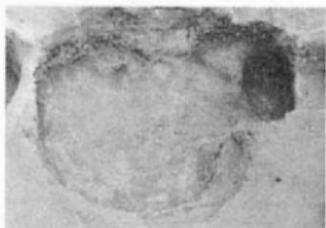


礎石群 A と 純石群 B の各部対比

図版 4



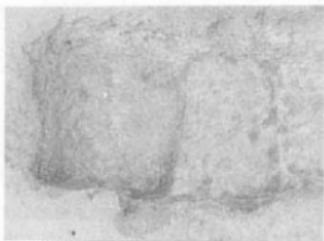
礁石群東のピット遺構全景



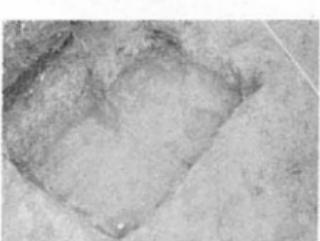
ピット-2(左), ピット-1(中), ピット-20(右)



ピット-3(左), ピット-14(右)



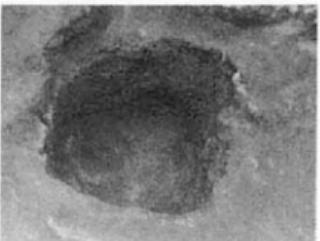
ピット-4(左), ピット-15(右)



ピット-5(左), ピット-17(右)



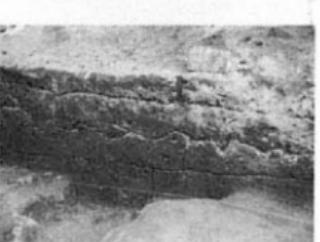
ピット-6



ピット-7



ピット-9 地層断面



ピット各部

ピット-19

図版 6



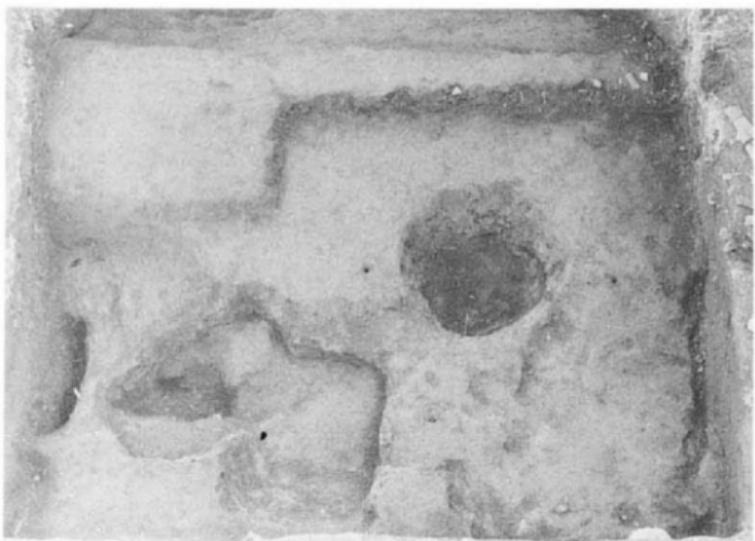
ピット-8（左） ピット-9（右）



ピット-9（左） ピット-12（右の地層断面）

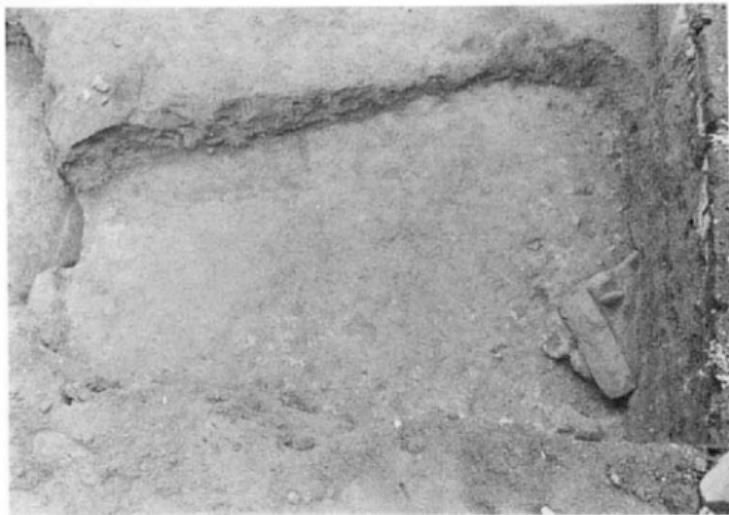


(1) 磐石群北、溝状遺構イの瓦の堆積

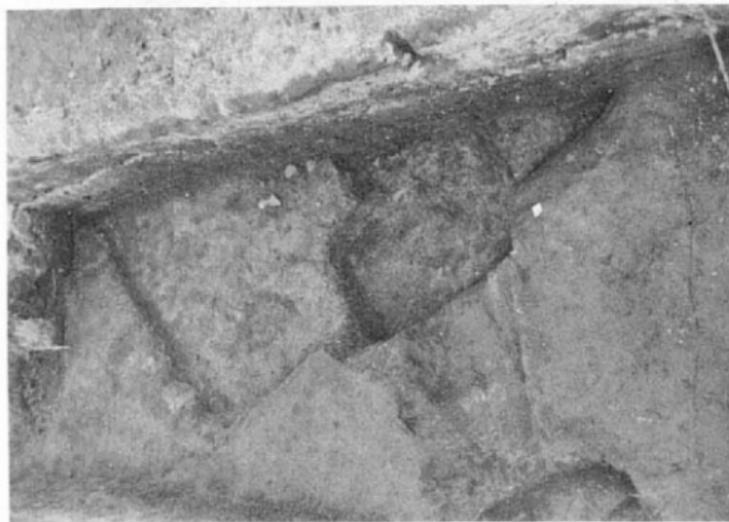


(2) 磐石群北のピット遺構

図版8



(1) 4号住居跡（右隅が竪）

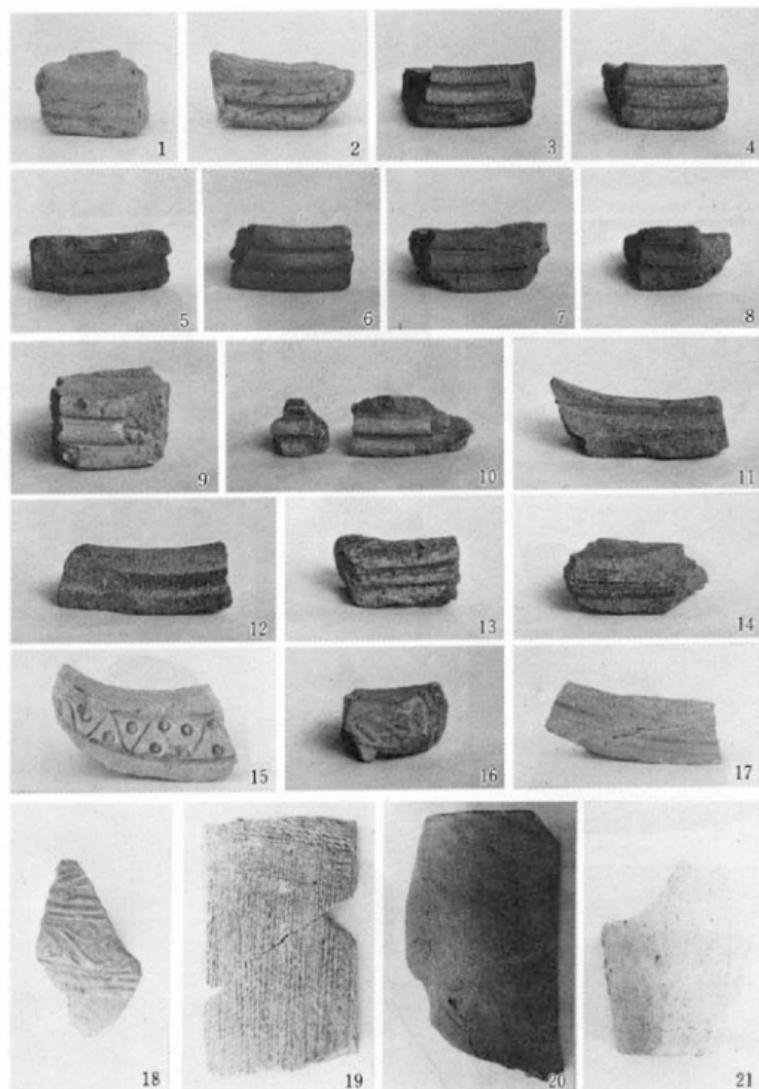


(2) 5号住居跡（住居内のピットはピット-11・ピット-19）

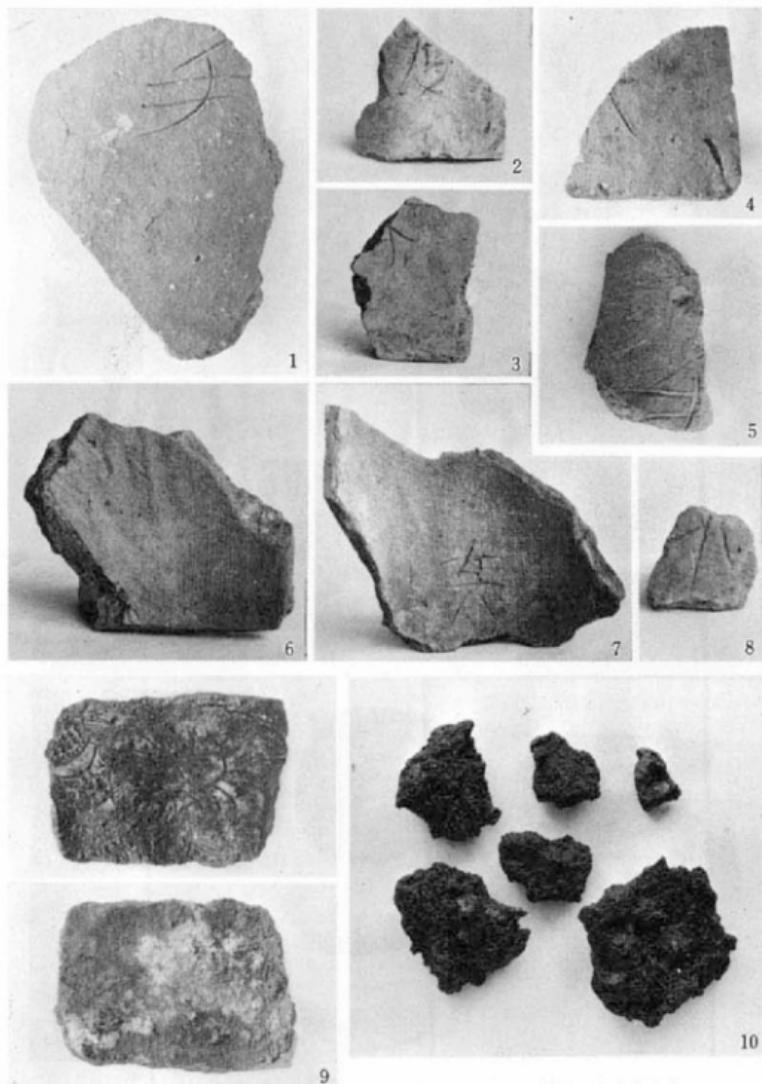


出土遺物(1) 軒九瓦

图版10

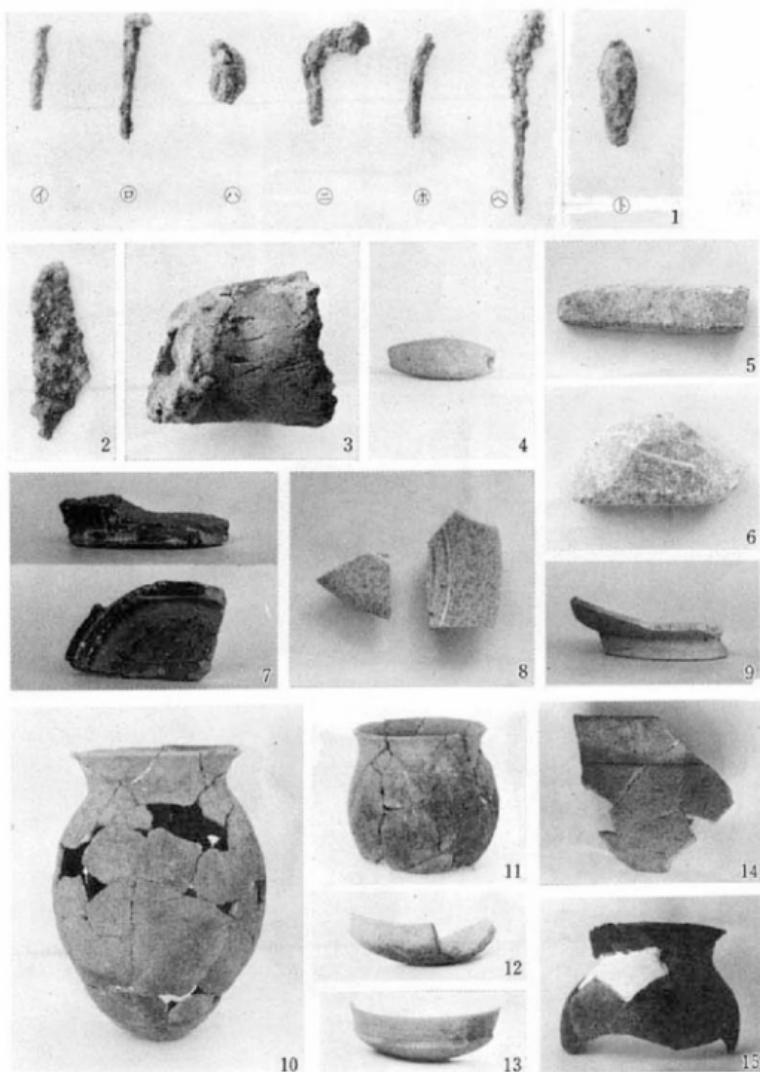


出土遺物(2) 軒平瓦 (1~17) • 平瓦片 (18) • ×瓦 (19) 丸瓦 (20・21)



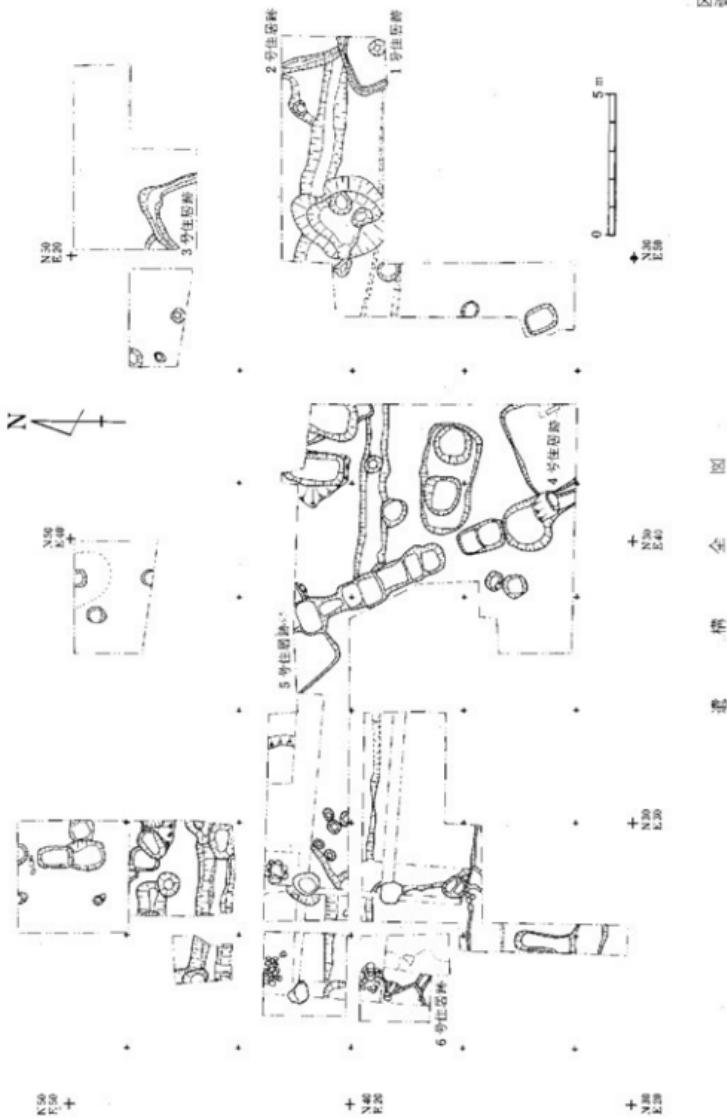
出土遺物(3) 文字瓦 (1~8) 金銅製品 (×2)(9) 鉄滓 (10)

図版12



出土遺物(4) 鉄製品 (1・2) その他 (3~9)  
住居出土土器 4号 (10~12) 5号 (13・14) 6号 (15)

图版13

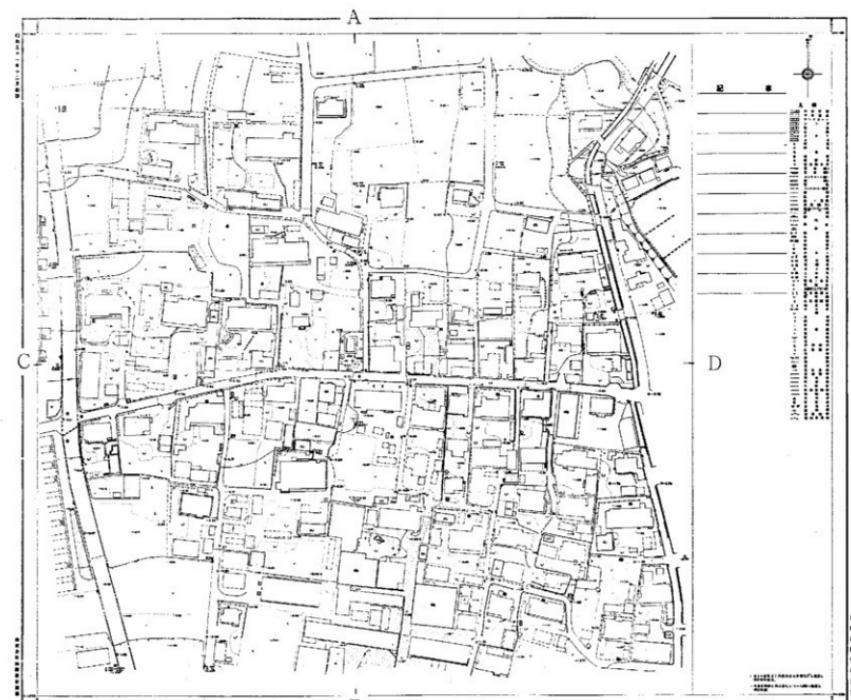


山王庵寺跡第3次発掘調査概報

昭和52年3月31日 印刷  
昭和52年3月31日 発行

印刷 有限公社 原田印刷所  
発行 前橋市教育委員会  
前橋市大手町二丁目11番1号  
編集 前橋市教育委員会 社会教育課

山王廃寺跡現形測量図



A  
A

B



(表紙) 重要文化財 根巻石 (昭和8年9月19日指定)

28 11 14

昭和10年7月山王塔跡東北約100mの地点で発見されたといわれている。  
この根巻石は建物の主要の柱の基部に巻かれた装飾品である。石製で7片  
からなり蓮弁を形づくっている。わが国においてはこのようなものは他に  
類例がないが、かつて、東京大学が中国東北地区にある東京城を調査した  
折、陶製のものが出土しており、これによって用途を頬推している。

(参考:『前橋市史』第1巻)